上郷町南条下田圃地区土地改良事業に伴う
発掘調査報告書

南条棚田遺跡 I

長野県下伊那郡上郷町産業課
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

水田跡・木柵列の杭と加工木製品

長大杭　　加工木製品　短杭各種　　木柵杭

序

昭和60年度から土地改良総合整備事業、南条地区について実施することになりました。

本年度に於ては、下田圃工区4.2㏊の内、0.8㏊の区画整理を実施するよう計画を立てましたが、本地区は棚田遺跡となっており、工事に先立ち発掘調査を行いました。

当地域は、天龍河岸段丘の最下段であり、栗沢川左岸の低湿地にあたる所であったが、調査の結果、弥生中期から平安時代にかけての県下でも数少ない水田跡で、土器、陶器片、石器、加工木材等数々の遺物も発見されました。

今回の調査に際しては、調査団長に今村善興先生に担当していただき、公私共に大変御多忙の処、又泥土との闘いで大変な御苦労をお掛けしましたが、此々に古代文化の遺産として今後に記録保するため、報告書の刊行が出来ますことは、先生をはじめ発掘作業に御協力をいただいた多くの作業員の方々の御尽力の賜と深く感謝を申し上げる次第であります。

昭和61年3月

上郷町長　山　田　隆　士

例　　言

1. 本書は、昭和60年度上郷町南条下田圃地区区画整理事業第一期工事に伴う「南条棚田遺跡」の発掘調査報告書である。

2. 水田跡とそれに伴う水路・木柵木列が主であるので、それについての遺物・遺構図示を多くし、他のものは少なくしている。

3. 各種木製品の製図に当り、可能な限り複写機で写し加筆している。石器も一部その方法を取っている。

4. 本書の資料作成に当り、現場での計測・記録図作成は調査補助員今村の協力を得て今村が当り、木柵杭列の計測は、林が当っている。石器計測は林が当り、整図は今村が当っている。

5. 本書の編集・報文執筆は今村が担当した。

6. 出土遺物等は一括して上郷町歴史民俗資料館に保管してある。

目　　次

序　文　上郷町長　山田　隆士

例　言

Ⅰ　南条地籍の環境　1

1. 位置と地形　1

2. 歴史的環境（主として遺跡）　1

Ⅱ　調査の経過　2

1. 調査経過　3

2. 調査団組織　4

Ⅲ　発掘調査の結果　5

1. 遺跡の概要　5

2. 遺構と遺物　6

(1) 水田跡　6

(2) 水　路　8

(3) 木柵杭列　9

(4) 溝状遺構1　10

(5) 溝状遺構3・4　10

(6) その他の遺物　10

Ⅳ　調査のまとめ　11

1. 南条棚田遺跡と調査区の立地　11

2. 弥生時代水田跡の発見　11

3. 弥生時代阿島式土器の問題　12

4. 木製品保存処理　12

5. プラントオパール分析　12

6. 低位段丘重要遺跡群の解明　13

後　記　14

〔挿図目次〕

1図　上郷町棚田遺跡の位置ほか　15

2図　南条下田圃地区農改事業地　16

3図　棚田遺跡遺構配置図　17

4図　水田跡、溝状遺構3・4　20

5図　水田跡周辺土器片出土地点　19

6図　北側水路　21

7図　木柵杭の配列　22

8図　弥生時代水田跡の杭1と木製品　23

9図　弥生時代水田跡の杭2　24

10図　木柵杭列の杭　25

11図　水田跡周辺出土の木製品と土器　26

12図　水田跡・水路出土の土器　27

13図　水田跡周辺出土の石器　28

14図　水路と上段出土の石器　29

15図　水路周辺出土の砥石　30

16図　溝3・4グリット出土の土器　31

〔写真目次〕

図版1　棚田遺跡の景観　33

図版2　水田跡、溝A・B　34

図版3　建築遺材と加工木製品　35

図版4　弥生時代畦畔の長大杭　36

図版5　弥生時代畦畔の短杭1　37

図版6　弥生時代畦畔の短杭2　38

図版7　畦畔木杭出土状況　39

図版8　水路と溝状遺構　40

図版9　木柵木杭列1　41

図版10　木柵木杭列2　42

図版11　木柵の杭　43

図版12　弥生時代打製石器　44

図版13　石器出土状況　45

図版14　流木の出土状況　46

図版15　水田跡周辺の土層　47

図版16　調査団と発掘風景　48

Ⅰ　南条地籍の環境

1.　位置と地形

長野県下伊那郡上郷町は、飯田盆地のほぼ中央に位置する。東は天龍川を挟んで喬木村に接し、北は土曽川によって飯田市座光寺に、野底川上流山地で高森町・飯田市松川入に接している。南は鷹巣山、風越山から野底川下流・松川によって旧飯田市・旧鼎町・旧松尾とに接する26㎢に及ぶ広大な地域をしめている。

この地域は南流する天龍川とその支流によって形成されたいくつもの河岸段丘と扇状地の広い所で、古くからの人々の恵まれた生活舞台で後述の遺跡の多い所である。

伊那盆地全域に広がる河岸段丘は、火山灰土の堆積を基準にして高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・Ⅱに大きく編年されている。上郷町にある段丘は、火山灰土を含む洪積土壌の堆積する中位段丘・低位段丘Ⅰと、火山灰土ののらない沖積土壌のみられる低位段丘Ⅱに当るものである。前二者は普通上段と呼ばれる黒田地籍の各段丘であり、後者は下段と呼ばれる飯沼・南条・別府地籍にあたる。飯田市松尾地籍と共に低位段丘Ⅱが特に発達している地域と知られ、立坂段丘崖下の低位段丘Ⅰの立坂面に続いて飯沼面・南条面・別府面が夫々南北に横広く、高低差をもって東西に続き、下伊那地方の模式地になっている。

南条面は図Ⅰのように天龍氾濫原に続く最も低い段丘で標高400～410m、天龍川から10m位の比高である。北は土曽川右岸・農免道路周辺から矢崎台地先端部・高屋線上方栗沢川から田中八幡北一帯の上段面も含まれている。4～5m位の比高差をもって別府・飯沼面に湾曲しながら続く。この低位段丘は松川左岸の別府面と土曽側右岸の飯沼面が高く、南条面がその中間に湾入し幅広い凹地とその下方に広がる最低位の段丘面である。低位段丘Ⅱは湧水が豊富で地下水も高く典型的な水田地帯であるが、南条面はその傾向が著しく立坂崖下から南条にかけては沼沢的な低地が多く水田地帯の中心部に当る。棚田遺跡は上郷町飯沼の内南条にあって、低位段丘Ⅱａ1、南条面下部の中央栗沢川左岸に位置し、氾濫原までは100m程である。

2.　歴史的環境（主として遺跡）

上郷町の遺跡は、昭和57年度の詳細分布調査によると埋文包蔵地69・古墳32基・中世城跡3の合計104遺跡である。南条地籍には棚田・竹の内・北浦・びくに田・一丁田・藪越・雲彩寺・堀尻遺跡の8個所、古墳は天神塚・中島の2個所である。この事は地籍の狭い事もあるが、低湿地が多かったり沖積層が深く発見し難い面もあろうかと思う。遺跡の中心は別府面に属する藪越・

雲彩寺・一丁田遺跡であるが、「北浦」（昭和59調査）・「棚田」遺跡の発掘調査によって低湿地遺跡の見方も変ってきた。

南の別府面は全域殆ど遺跡で別府古墳群もある。この中、栗沢川右岸の高屋遺跡は左岸の藪越遺跡と共に町内代表遺跡の一つで、弥生・古墳・奈良平安時代の重要遺跡とされている。藪越遺跡は、縄文時代から弥生・古墳・奈良・平安・中世に至る複合遺跡で、特に弥生時代中・後期、古墳時代前・後期の遺物出土が多い。低湿地に面する所も多く古代水田跡も予想されてはいるが、今まで実証の機会がなかった。今回の「棚田遺跡」の弥生時代水田跡の発見は、南条面のみならず飯沼面・座光寺面にかけての遺跡立地の見方も変ってこよう。北側飯沼面は古墳こそ少ないが、弥生時代から古墳・奈良・平安・中世期の遺物出土が特に多く、別府地籍と共に当町の主要遺跡地帯で郡下の重要遺跡群の一つとして注目されている。南条面は、前述の様に別府・飯沼面に間する地域で生産遺跡地帯として注目されるようになろう。

南条はその名の如く、古代条里の存在を伺えそうな地名であり、近年飯田市座光寺恒川遺跡群内に古墳・奈良・平安時代の重要遺構・遺物の発見が続き、古代伊那郡家の存在が確実視されているが、関連遺跡として同一段丘面に立地する飯沼・南条・別府地籍も又重要遺跡群と考えなければならない。古代伊那郡家がこの段丘面に存在したならば、この上郷の低位段丘面の何処かを古代東山道が通過したであろうし、郡家を支える生産基盤が上郷地域まで広がっていたであろう。古墳・奈良平安時代の生産基盤の先駆けとなる弥生時代の集落・生産地帯、特に水田耕作地帯が広く存在した地域であろう。

弥生時代の遺物包蔵地は、上郷町69遺跡中47遺跡に及び、低位段丘面33遺跡である。中・後期の時期差別は不詳であるが、多くは後期であろう。座光寺恒川遺跡の調査によれば、集落立地は同一地重複の場合とわずかに所を変える例もあるが、上郷の場合は今の所はっきりしない。低位段丘面の遺跡中図１にある弥生時代の遺跡は、ドドメキ・中島・宮垣外・矢崎・高屋下・高屋・棚田・北浦・びくに田・一丁田・藪越・雲彩寺・堀尻・南原・ヒエ田・的場・西浦・ママ下・堂垣外・丹保・矢剣・長橋・藪上遺跡等で、調査が進めば更に増えるものと思う。

勿論水田跡の発見は今回の「棚田遺跡」だけであるが、遺跡立地を考えれば各地域広範囲にわたる水田耕作地とそれに関わる集落が存在するに違いない。特に湿地帯に面する地域の多い南条地籍には特に多いと思われ、来年度以降の発掘調査に大きな期待が掛けられている。

Ⅱ 調 査 の 経 過

1. 調査経過

昭和60年８月、上郷町産業課の事業として南条地区下田圃団体営農業構造改善事業開始に当り、同町産業課と教育委員会の保護協議が成立し上郷町教育委員会から今村に緊急発掘調査の依頼があった。

昭和60年10月21日発掘資材を栗屋元遺跡から運搬し、図２の事業計画地３の道路添いを基点にして南北方向にグリットを設定した。南北50m単位にＡ・Ｂ地区とし、東西を１～、南北をＡ～としグリット呼称を決め、Ｄ列５～９のグリット掘りをする。(図３参照) 共に黒色土は深く東程著しく、下層に植物遺体流木・木片の堆積があり、５Ｄでは青灰色粘土質土は2.8ｍの深さにあった。10月22日にＤ11から近代暗渠排水路と、中世以前の木柵列の検出があり、11列、ＭＮ列のグリット掘りを進める。ＭＮ列９～13にかけて溝１の他粘土質土に細い何条かの溝を発見し、遺物も中世陶器、平安・弥生時代の土器も少量出土している。

10月28日から上方田（図２の２）のグリット掘りに入る。東側土堤際は黒色土は1.25ｍで下層から弥生時代の土器片が出土した。西に行くにつれて黒土は浅くなるが遺物出土が多くなったので上段の田全面グリット掘りにかかる。11月２日20・21列に竪穴状の落込み２個所が発見されたので北側へ拡張することになった。11月８日までに溝３・４の検出を終り、北側に長く続く溝２（後の水路）の検出に入る。竪穴１（後の水田跡・溝ＡＢ）・溝２からは弥生時代の土器片、石器類の出土が多く、木材の量も多いので遺物出土地点を詳細記録しながら検出作業を進めることにした。

11月18日から遺構の広がりを見る為に、Ｂ地区上段のグリット掘りをする。全体累石が多く確たる遺構はなかったが、弥生時代中期の土器片・石器の出土があり、水路状の所もあった。来年度の工事範囲でもあるので打切った。

11月19日から竪穴２の下層からは弥生時代中期の包含層の検出、溝２の下層検出、木柵列の拡張調査を続ける。ＰＱ列の下層からは弥生時代中期の土器片出土が多く土器片を求めるままに下層石の面まで掘ったが木杭列の発見もあり、畦畔状の所もあって掘り過ぎに気がついた。そこでＬＭ列、17・18列を中心に黒色土層から更に詳細調査に入った。時々の雨、寒さもあって泥状の中の検出作業は予想外に手間取った。溝２の下層調査により南の水田跡の溝Ｂに続く水路であることが確認された。

11月31日には、県埋文センター市沢英利、上郷町岡田正彦氏の現地指導を願い水田跡検出調査方法の示唆を受け、12月２日からは、黒田地区の方々を除き総員５名により水田跡木柵列・水路の詳細調査を進めた。

12月３日、水路最北部の検出により、近世の暗渠排水路に重複するように古い排水溝があったようで、ここを境にして南からと、北からの水路が傾斜を異にしている。東に砂盛の層があったが排土も深く、来年度の調査区に入る為拡張は断念した。ＬＭ列では黒色土下に細い溝があり、Ｌ列のセクションベルトによって上下層に数条の落込みを確認している。12月５日から畦畔状盛土と他の畦畔存在の検出を進め、直行ぎみのもの、別位置にあるものも確認した。この日は建築遺材かと思われる加工木材（図８の４・５）の発見もあった。又この日から木柵列の掘り下げ・断面調査に入っている。

12月６日上郷町文化財調査委員会の方々の現地視察もあった。12月10日には水田跡下層の検出をした。畦畔か溝か確認するために一部断ち割り調査もする。畦畔１に添う木杭列があり、Ｑ12の東隅に砂盛と落込みを検出している。12月11日には、52cmもの丸棒木杭（図８の２）、木製農具も発見されている。12月12日には、全員出席最後の検出・測量を済ませ、資材撤収をして38日間の調査を終了している。12月13日、木杭に心残りがあったので堀割調査をして板状大杭（図８の１）の他数本取上げている。

なお、整理作業は、主として１月８日から２月初めにかけて実施し、報告書刊行の運びとなっている。

2. 調査団組織

(1) 調 査 団

団　　長	今 村 善 興（長野県文化財保護指導委員・日本考古学協会員）
調査補助員	林　　敏　今 村 倶 栄

(2) 調査事務局

吉 川 昭 文（教育長）	篠 田 公 平（教育委員会事務局長）
北 原 克 司（産業課長）	林　　慶 一（新農耕係長）
吉 川 勝 一（社会教育主事・係長）	林　恵津子（社会教育係・主任）

(3) 協力作業員

下 平 卓 治	吉 川 富 男	下 井 稲 穂	田 中　　勇
鎌 倉 計 美	清 水 寿 美 子	北 原 孝 子	林　　貢
小 林　　薫			

Ⅲ　発掘調査の結果

1.　遺跡の概要

南条棚田遺跡は最下位段丘の中央部にあり、弥生・古墳・平安時代の何れかの遺物出土・集落の存在を予想したが、遺物は弥生時代中・後期、古墳時代後期、平安時代、中・近世の遺物が多く、遺構は、中世以前の木柵列・溝状遺構、弥生時代中・後期の水田跡に関わる畦畔、木杭列、水路等で遺構の性格から見て発掘面積が狭いため全体の構成まで摑み得なかった。

水田跡はＡ地区上方の田の南側で発見され、（３図）二条の水路（溝Ａ・Ｂ）、畦畔状盛土四条、木杭26本以上によって構成されている。或いはと予想はしていたものの下伊那地方は勿論、県下でも稀有の遺構発見で検出方法にも不備な点も多い。溝Ｂに続く水路が北へ20m以上構築され、北から別の水路が流れ込んでいる。水田跡・水路共に板状木材の流入が多く、中には加工品も含まれている。上層に弥生時代後期、下層には弥生時代中期の遺物包含があって、二時期にわたる水田跡の存在が想定される。下段の田の北隅に発見された溝１と、細い溝状の遺構・何本かの杭も水田跡に関わるものであろうと思う。

下の田の南道路添いに木柵が見つかっている。杭は材も大きく杭先の削りも鋭い。畦畔を支える木柵で間隔的に並ぶもの、密に打たれたものがある。近代の暗渠排水路に一部切断されているが近世の古い水田床土の下から打ち込まれているのと、周辺の出土遺物から中世期以前のものと見たい。これとは別に上段に水路を横切る二条の溝が東西に走っている。一気に流れ出した流水路跡かと思うが、その時期は中世期か平安時代のものであろう。

棚田遺跡は最下位段丘南条面のほぼ中央に位置し、南の栗沢川、北の新戸川に挟まれた最低地にある。栗沢川は西から東へ、新戸川は北西かが南東に流れ込んでいることからもわかる。この二川の間には南に棚田遺跡、東に竹の内遺跡があって両遺跡の間が最も低い。高屋線添い上方には北浦遺跡があって、昭和59年の発掘調査により低地のあったことが確認されていたが、その低地が棚田遺跡の北東部に続いているもので、３図のＤ５グリットで見られた植物遺体・流木の多量堆積の黒色泥土が深いように、低湿地に面する位置に遺跡が立地しているわけで、水田跡検証の最適地ということが出来よう。従って、来年度に掛けて実施される農業構造改善事業に伴う緊急発掘調査は水田跡範囲確認には絶好の機会とも言えよう。遺物は、縄文土器片１片、弥生時代中・後期土器片多数、石包丁ほかの石器、古墳時代土器片、平安時代・中世期の土・陶器片等が多く出土しているが、主体となる遺物は弥生時代のもので、木製品に特長がある。

2. 遺構と遺物

(1) 水田跡

① 遺構（3・4図）

上段南側で確認した遺構である。西側に落込みがあって、そこから黒色粘質土が傾斜しながら堆積している。その黒色土下層から茶褐色粘質土上層にかけて幅45～60cm、深さ10～15cmの2条の溝A・Bが土地傾斜に添って並行している。黒色土下には薄く砂層があるが、溝底と両側は厚く溝A・Bの間には帯状に厚く堆積されている。溝BはN・O列で検出し兼ねているが、P列から幅は狭いが深さを増し溝3・4に切られその後北の水路に通じている。溝Bの下を直交するように南東へ延びる畦畔状の砂質土・粘土質土帯が認られる。N列の2が最も整い砂質の帯は30～40cm幅、高さははっきりしないが5～10cm程度である。水田面は不詳である。南に湾曲状の粘土質帯3、わずかに粘土帯の形跡を持つ4、北のP列に粘土帯の一部がある。その間隔は、南から2.5m・2m・3.5mを測る。溝B添いの下部粘土質土に盛土の残りが並ぶ。後述の杭列と並行するので畦畔の名残りかと思う。P1・2は粘土質土に掘り込まれたもので、砂と植物遺体が堆積し細い溝を持っていて、水田と関わりがあるものと思う。

木杭は30本検出しているが、いくつかの配列がある。溝A南東添いの21・22・26、23～25の列、溝B添いの7・8・10・11～14と、畦畔1に添う1～4、畦畔2に添う15～17・28である。水田区画の最も整っている所は畦畔2と4の間で、杭の並びも整っている。この区画内の杭には長大なものもある。9（8図1）は、台形板状62cm、1（8図2）は細い板状52cm、17（8図3）は丸棒状の加工品52cmで27も大きい。他は短いが角柱・板状あり杭先は刃物削り・斜切断・無加工等各種ある。（8・9図参照）畦畔2・4を取巻くように打込まれている。黒色土を中心にして板状木材も多く、溝B内、L_{19}・O_{17}に集中する。O_{17}の木は下部茶褐色土中にあり、この下は茶褐色砂質土の堆積が多く、他と様相を異にしている。N～P列西側は川辺りと思われる落込みが続くが西に湾入して広い。遺物出土も多く川辺りの使用も予想される。N・O列に石が多く見られるのは、下層に弥生中期の土器片が多く出土するため堀下げを早く進めたためである。

水田跡は西、東へ続いているものと思うが、調査期間の不足と来年度工事区内の為調査を打切った。畦畔区画は、弥生中期、溝A・Bは弥生時代後期と想定されるが、木杭については中・後期判別は難しい。

② 遺物（5・8・9・11～14図、写図6～13）

遺物は土器片・石器・木製品である。土器・土器片は、古墳時代後期、弥生時代後・中期のもので器形のわかるものは、高坏・甕形土器胴低部・口縁の一部である。土器片の出土地点と層位を5図に示してある。古墳時代の土器片はO・P列に多く黒色土上層に多いが、中には下層からも出土している。

弥生時代の土器片の出土状態は、平面的には大きな差はない。強いていえば南側では中期のも

のが多い。南程茶褐色土層が深く最下層まで堀下げてないので掘ればその傾向は強くなろう。層的に見ると後・中期の包含層ははっきりしている。黒色土層は、古墳時代後期、弥生時代後期の包含層、茶褐色粘質土層は弥生時代中期の包含層と見たい。弥生後期の土器片の中には、5m以上離れた土器片が接合されたものが4組あった。水田耕作による移動があったのであろう。11・12図によって土器片を見ると、7～12は古墳時代の土器片で8は胎土の白い移入のものである。9・11～14は同一個体のものと見られ、表裏にかき目文を施し、輪積みの跡が残る甕形土器で、黒色土上層出土のものである。

11図15～32、12図1～48は水田跡一帯から出土したもので、15～32は弥生時代後期中島式土器片であるが、中には座光寺原式のものもある。12図1～48は中期阿島式並行の土器片で、1～14は押圧突帯・口唇に押曳文等を施文したものである。15～18は朱彩土器、22・23は朱彩の口縁、27～29は貝田町系、19～21、24～45は各種条痕文土器、46～48は底部である。

石器は60点ほど出土しその出土位置は4図にある。13図の1～9は鏃形石器で、3・6～8は緑色片岩で3は4mほど離れたものが接合されている。他は硬砂岩製で1は長さ48cm、厚さ8cmもの雄大なもので使用磨滅痕が目立つ。10～12は有肩扇状形石器、13～22は硬砂岩製打製石包丁と横刃形石器である。鏃形石器は東南側、石包丁は西北側に多い。弥生時代中・後期の区別ははっきりしない。

木製品は建築遺材、加工丸棒・板材、畦畔木杭である。(8・9図、写図3～7) 建築遺材(8図4)は、長さ22cm、幅4.5cmの角材で、2cmほどに削りとり、中央にほぞ穴を穿ち両端を鋸状の工具で切断してある。出土地点は、溝Bの東側黒色土中層で他の木材と同位置にある。加工丸棒状木製品は、長さ13cm・幅2cmの楕円形のもので、中央辺りからきれいに削り細めている。出土地点は南側溝B添いである。板状加工品(6～8)は両端切断されている。材質はヒノキ・サワラと思われる。

木杭は各種ある。長大杭は3本、短杭は23本取上げている。(8・9図) 8図1はクリ材62cm以上、2はサワラ材52cm以上で丸棒に削加工し、杭先は斜切断してある。3はマツ材52cmで板状に割り取った粗製品である。共に下部青灰色粘土層まで深く打込まれ、畦畔区画のコーナー辺りに位置する。(図中頭の小番号は4図の出土位置を示す) 9～11はヒノキ材22～26cm以上、杭先が刃物加工されたもので、南側溝Bとその外にある。9図1・2はヒノキ・スギ材24～31cm以上角材の杭で、溝B内にある。2・3はヒノキ材長さ27、28cm以上、幅5cmほどの割作りの杭で刃物削りはない。3はセクションベルト中にあったもので、杭頭の切断加工跡がよく残っている。共に南東側出土である。4～6は割木を斜切断したもので、19～22cm(6は別)、幅2.5、3.5cmのスギ材である。7はベルト内のため杭頭切断跡がはっきりしている。O列北に位置する。8・9はスギ材表面を残して割出したもので、長さ22・25cm、幅2.5cm～2cmの平たい杭で、畦畔2の南東に4本直列したものの内である。10は23の杭先、11～14は流木中の杭と思われるもので、11・13は焼けて炭化状になっている。

杭の形態的配置を見ると長大杭は畦畔のコーナー、短杭先の刃物加工は溝Bとその西、細角材

は溝B内西、角板状は畦畔2・3の南東、木表残しの板杭は畦畔2の南東、杭先斜切断杭は、溝B北に分れている。時期的判別の根拠になりそうである。

その他の遺物は、板状木材ほか・桃種子・くるみ・竹材・葦の茎葉その他の植物遺体である。

(2) 水　路

① 遺構（3・6図）

水田跡溝B北北東に続く水辺と水路である。水路の検出面は9mほどであるが、水田跡の東、更に北へ続くので相当の長さになるであろう。ここを大きく見ると、溝状遺構3・4の北は南から続く川辺の落込みから水の流れが北北東にあったようで、多くの流木の方向がその流れに沿っている。そこには黒色土・砂質土・茶褐色粘質土の堆積があり、水田跡一帯と同様に、弥生後期、中期の土器片が包含されている。水辺の落込みに近い所の内、土器片・石器が集中する所、石器剥片の多い所がある。即ち、T・N16グリットには弥生後期土器片、石包丁形石器4個が出土し、X15辺りでは、石器・砥石、剥片が多く水辺使用の跡がありそうである。

水路はU15グリット北ある。幅7～8mで石の多い浅いU字状で、水路中に弥生中期土器片・石器が出土している。東側には黄褐色の砂質土の帯がありそうで、杭も穿たれ畦畔に添う溝の様である。S印の大形石を境にして水路の傾斜が異っているのにも注意したい。偶然近代の暗渠排水路に切られているがこの辺りに排水口（或いは引水路）があったのかも知れない。この辺りに流木の堆積が特に多かったのも合点できる。

土堤先端部の為と、排土盛が大きかったこと、来年度の工事予定地でもあるので拡張調査をしなかったが、畦畔・水田跡存在の可能性の高い所である。

② 遺物（12・14・15図）

この一帯では、川辺の落込みの上・壁面に平安・古墳時代の土器片が出土しただけで、他は全て弥生時代後期・中期の遺物である。従って、多くの流木も弥生時代に関わるものであろう。

12図1～23の土器片は弥生時代で、1～6は後期中島式、7～23は中期阿島式の土器片で、水田跡から発見された土器片と同時期のものである。

石器は20点ほど出土しているが、鍬形・有肩扇状・石包丁・横刃・打器・砥石等一揃い出ている。14図1～4は鍬形石器、6・7は有肩扇状形石器、10～12・15は石包丁形石器で全て硬砂岩製である。鍬形・有肩扇状形は主として水路中、石包丁は水辺の黒色土中に多い。木片の堆積も多く、大きな板材状のものもある。加工板・杭かと思われるもの（8図6・9図12）もある。15図は砥石である。2を除いて水辺に多く、北側に集中している。

14図8・9・13・14・16は北側上段の田、下部累石群の上から弥生時代中期阿島式土器（16図1ほか）と共に出土したものである。ここにも溝状に凹んだ所が南東へ続くので、或いは下の水路へ続くかも知れない。来年度検証したい所である。

(3) 木柵杭列

① 遺構（3・7図）

下段南側道路添いに発見された杭列である。水田耕土の下に灰褐色砂質土があり、そこに古い水田（古くても近世）の床土がある。この下に杭頭が位置するので、中世期かそれ以前であろう。

中央を近世暗渠排水路に切られ、南は道路下に入っているので不詳の所があるが、長さ5m・幅1.5mほどの範囲に100本余の杭が並んでいる。南側では杭間隔は密に、北側では間隔を置いてやや規則的に打たれている。その境界が暗渠排水路で切られて構造不明であるが、水田跡に拘る水路が畦畔の木柵杭列であろう。全体の配置図、東側の断面図を見ても杭は蛇行状に続くことがわかる。

7図A・Bの断面は直線的に切断したのではなく、杭位置に添いながら切断したので杭の間隔距離は実際と異っている。1～9の間隔は1から40・25・30・27・32・24・40・25・75cmを測る。土層位は場所によって多少差異があるが、下部床土の下から、黄褐色砂質土・黒褐色砂質土・黒色粘質土・灰褐色砂質土・青灰色粘土質土・青灰色砂質土が堆積し、長いものは青灰色粘土質土まで打込まれている。残った杭頭辺には黄褐色砂質土が2～3cmある。断面C・Dで見ると杭間に24cmの落込みがあって、畦畔か水路かはわからないが水の影響があったものと思う。

北側・西側にさらに続くかと思ったがなかった。西土堤際に何本かの杭があったが上部床土下からの打込みで、近世以降と思われる。地主吉川富男氏の話によると、新しい暗渠排水路敷設工事中木杭が多く出た所があるがその場所は失念という。他にもこの様な所がありそうである。

② 遺物（10・11図、写図11）

元々この辺りは遺物の出土が少ないため、時期判定の遺物に不足する。11図3～6は、平安時代の土器である。3は土師坏、4・5は糸切底・へら切底の須恵坏、6は須恵器片である。4・5は北杭列東側、黄褐色砂土中、3・6は南杭間から出土し、このほかに平安須恵器片4点が出土している。外には他時期の土器は全く出ていないので、遺物だけで見た限り平安時代のものと見られる。

木杭は南側のものは短く北側のものは長めで、取上げたものは40本余である。その内図示したものは10図の19本である。最も長いのは64cm以上(1)、短いものは50cm(5)である。角形・矩形形等があるが皆鋭い刃物加工痕が残っている。材質はサワラと思われる。

杭は丸太材を幾つにも割り、木表を残し本芯を剥ぎ落したものが多い。中にはそれを半割にしたものもある。杭先は四方刃物削りしたもの（1～14）、左右だけ刃物削りしたもの（15～19）がある。1は長さ64cm以上、幅6.5cm、厚さ4.5cmを測り杭先加工も四方から丁寧に加工してある。

11図1の木製品は、木柵杭列の西から出土し、縦23・横12・厚さ1.5cmの平鍬状木製品である。穴は斜めに穿たれてはいるが、割れた形跡はない。

(4) 溝状遺構1

① 遺構と遺物（3図）

下段の田北隅で確認された池状・溝状遺構である。表土から65cmほどの所に池状の落込みがあり、そこから南東に向って深さ40cmのV字状の溝があった。近世暗渠排水路3があって詳しくはわからないが、この溝は上段水路の落口方向に向いている。土地状況で拡張してないのではっきりしない。遺物の出土は少なく、上層で中世陶器片、下層で古墳時代・弥生時代後期の土器片が出土している。

溝から西にかけて細い数条の溝が青灰色粘土層に掘られていた。後になって気付いたことであるが、或いは上段の水田跡に拘るものであったのかも知れない。

(5) 溝状遺構3・4

① 遺構（3・4図）

上段の田水田跡と、水路の間にあった砂質土の多い大きな溝で、西から東へ流れている。幅は狭い所で1.6m、広い所で2.8mで左右二条の流路になっている。出水による一気の流路の様で砂・石が充満している。

② 遺物（16図）

溝中には弥生時代の土器片・石器もあったが、新しいものでは平安時代須恵器片（16図2・3）、中世陶器小壷底(5)が出土している。

(6) その他の遺物（16図）

古墳時代後期土師器・平安時代須恵・灰釉陶器・山茶碗・古瀬戸碗・仏花瓶・擂鉢等である。遺構の発見はなかったが、出土点数は多い。

Ⅳ 調 査 の ま と め

1. 南条棚田遺跡と本年度調査区の立地

南条棚田遺跡は最下位段丘南条面の中央にあり、梨沢川左岸に位置する。右岸の高屋下遺跡に比べるとやや低く、東は低地に面していて遺物出土も少なめで、弥生時代・平安時代の包蔵地として登録されていた。今回その一部の発掘調査により、弥生時代後期・中期・古墳時代後期・平安時代・中世期・近世期の遺物多量出土により複合遺跡の様相を強めた。本年度の調査地区は東縁に近い位置にあって、西北上方北浦遺跡の低地から続く低湿地が東にあるものと推量される結果が出ている。従って北にも低湿地が帯状に存在するものと予想される。この低湿地を越えた北側一帯はまた高さを増しそうで（工事掘削状況から）棚田遺跡に相対する別の遺跡がありそうに思う。

今回の調査区の田を下からA・B・C（2・3図参照）として、Aは黒色土・茶褐色粘質土層が厚く流木・植物遺体包含の多い低湿地がある。Bの田は西上方は青灰色土は20cm以下で、先端部では1.5mと深く黒色土層の傾斜が強い。Cの田は上方で青灰色土は30cm、南・南東は累石が多く、東への傾斜が強い。この様にわずかの高低・位置の違いで土質・土地傾斜の差異が大きい。このことは、低湿地に面する複雑な地形を示唆している。棚田遺跡内には、低湿地・水田耕作地、水辺とそれに近い場所・微高地の集落地が夫々立地しているに違いない。これらの場所究明が今後の大きな課題の一つである。

2. 中世以前・弥生時代水田跡の発見

Aの田で検出された木柵杭列は、即水田跡と考証し難いが、畦畔又は水路と考えれば水田跡が有力である。喬木村里原遺跡・箕輪町箕輪遺跡の例によく似ているが、伴出遺物から平安時代に比定されれば伊那地方稀有の発見である。

弥生時代の水田跡の発見は県下でも珍しく、弥生時代中期の水田跡の発見は県下では最初である。しかも、畦畔とそれに伴う各種の杭列・溝・水路の検出、弥生時代の中・後期の重複・刃物加工の木製品の発見等、どの一つを取っても貴重な発見であった。水田跡は此処だけに留まらず周辺に広く存在するであろうし、耕作民の集落（住居・倉庫群・生活広場・墓地等）も近くにあるはずで、この遺跡究明には大きな課題が多い

弥生時代水田跡についても色々な成果がある。細かい砂・粘土帯の畦畔が3～4条確認され幅2～2.5m、長さ3mほどの区画があり、杭列によって取巻かれている。他地区の例では大畦の杭列の検出はあっても、小畦の杭列までの検出は稀である。しかも、時期差はあろうかと思うが

長大杭・杭先刃物加工・斜切断・平切断・板状切断等形態も各種あり、夫々の機能を持っている。幸いこの周辺は来年度調査可能であるから、大畔・小畔の存在有無を含めて詳細な検証を試みなくてはならない。建築遺材・板状加工木材・焼け材・杭板状木材等多量の堆積があり詳細調査によっては、更に大きな発見が期待されよう。

溝A・Bとそれに続く水路にしても大きな発見ではあったが、調査過程での見通しの甘さ・拡幅調査の不足等心残りは多い。水路の東に続く砂帯の畦畔・排水口（水取入口）の機能・下段池・溝Aとの関連等残された問題も多い。溝A・水路の西に広がる水辺のテラスに古墳・弥生時代の土器片・石器（特に石包丁・砥石）が多かったのは、水田耕作に伴う作業場所があったとも考えられる。北一帯の今後の調査によって究めたい所である。

以上水田跡に拘わる課題は大きく又多い。来年度の調査に期待されるもの・今後工事予定外に集落跡の存在も予想されるから、広範囲に渉る究明調査も計画して欲しい所である。

3. 弥生時代阿島式土器の問題

阿島式土器は、下伊那地方弥生時代中期中ごろのもので、喬木村阿島五反田遺跡出土の土器を規範にして編年されている。しかし、阿島五反田遺跡の発掘調査は昭和34年のことであり、その後他地区での発見も散発的のため、多量出土は阿島五反田に続くことになる。現在下伊那地方の弥生時代中期の土器編年は、林里・寺所・阿島・北原・恒川式土器と順序立てているものの、阿島・寺所式は再検討必要とされている現在重要な資料になろう。

4. 木製品保存処理

木製品には木杭・建築遺材・加工板材・平鍬状板材（11図1）等の発見が多い。このままでは腐食・消滅の恐れが大きいため、現在はほう酸水中に当座保存している。恒久的保存のためには、真空乾燥・樹脂加工処理を必要とする。町教委はその処理を計画しておられ、有難いことである。

5. プラントオパール分析（水田面確認の為の）

プラントオパールとは、イネ・チガヤ・アシ・タケ・シバ・ノシバ等の300種に及ぶイネ科植物に含まれる植物ケイ酸体（機動細胞）のことで、イネのオパールは40～50ミクロンの大きさで一枚の葉には10万個のオパールが含まれていると言われる。

実際の分析は、土層ごとに土壌を採取し、定量の土を超音波洗浄して各層ごとにオパールの数を数えるもので、定量分析の場所は、オパールと同じ大きさ・重さのガラスビーズを混入させてその定量を分析することによって、イネの生産量まで算出出来るものである。

この分析方法は日本では1965年から研究が開始された新しい科学分析方法で、宮崎大学農学部

藤原宏志助教授によって考古学が対象とする遺跡の発掘調査や土器に含まれるプラントオパールの分析に応用され、大きな成果を上げている。特に低湿地の水田跡の発掘調査に威力を発揮し、発掘前に発掘地点の何個所をボーリングによって土壌を採取し、地下のどの部分に水田面が存在するかを予知することが出来る。これによって、従来では困難であった水田面の検出が可能となり、最近ではこの方法によって青森県垂柳遺跡で、弥生時代中期の水田跡が検出されて大きな話題となっている。

長野県で最初にこの分析方法が実施されたのは、昭和53年中央道西宮線建設に伴う茅野市御社宮司遺跡の中世畦畔状遺構から採取された土壌分析であり、その後、昭和60年には長野市篠ノ井石川条里遺跡で、当初から古代水田面を確認する手段としてこの方法が採用されている。この結果、既に検出されている平安時代後期の水田跡のほか、その下層から平安時代以前の水田面が推定されている。その後、松本市島立・更埴市でも藤原先生のプラントオパール分析に基く発掘調査によって中世の水田跡が確認されている。

今回の棚田遺跡の場合は、層序的に弥生時代後・中期の畦畔が検出され、中世か平安時代の木柵列も検出され土層位も確認されている。しかも、その隣接地は来年度継続調査可能であること、北側一帯に水田跡存在極めて有力である。長野県最初の弥生時代中期の水田跡の確証を得るためにも、又、水田面の範囲確認のためにも極めて適切かつ重要な科学分析の方法である。

費用の掛ることではあるが、南条地籍の古代水田の確証を得ることは、独り上郷町の為のみならず郡・県は勿論、全国的な学術上の成果を上げることであるから、この機を失して将来に過恨を残さないようにしたいものである。

〔プラントオパールについての説明内容は、宮下健司氏の報文（プラントオパール分析への期待）を参考にしている。〕

6. 上郷低位段丘Ⅱ地籍の重要遺跡群の解明

飯沼・南条・別府地籍に広がる低位段丘Ⅱの面には、郡下でも有数な重要濃密遺跡が目白押しである。同町教委主体事業として実施された遺跡詳細分布調査は、画期的な事業として高く評価される。この調査に基いて町単独事業として緊急発掘調査も積極的に実施されていることも有難いことである。

数年来発掘調査の進んでいる飯田市座光寺恒川遺跡群内では、伊那郡家所在が有力視される成果が上り、縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世に至る一連の文化様相が解明されつつある。この文化様相は、上郷町内とて変りはなく、これに優るとも劣らぬ古代文化圏の広がった所である。棚田遺跡で確認された古代水田耕作地も検出された現在、この生産重要遺跡解明の為に、堂垣外遺跡・北浦遺跡・棚田遺跡の様に町当局の積極的な文化財保護施策の推進を願って止まない。

後　　記

昭和60年度より着手された南條地区土地改良総合整備事業は、以後数年にわたり実施される計画となっております。計画該当地域には周知の埋蔵文化財包蔵地として棚田遺跡、一丁田遺跡、稗田遺跡が分布しており、いずれも部分的に遺跡がかかることになります。

埋蔵文化財の保護の重要性にかんがみ担当の産業課とその保護について協議していたもので、昭和59年度において専門家や長野県教育委員会文化課とも保護協議を経ています。

今年度棚田遺跡第１次発掘調査は、今年度分土地総整事業の施工に先がけ、事前にこれを行ない、記録保存をはかることにしました。

この調査は、先きの栗屋元遺跡の発掘調査にひき続き、考古学者の今村善興先生を調査団長にお願いし、献身的な調査活動が展開され、弥生期の水田祉の発見をみたことは、これまでの当町の歴史にあらたな記録を加えることになり、さらにこの発見は全県的にみても例が極く少なく、各方面の注目と考古への期待を高めるものとなりました。成果の全容は本書に記録されたとおりです。

今回調査に関し、土地所有者占有者の方方のご理解や、諸施設設備の提供をいただいた地域の方方のご協力に深く感謝申しあげます。又この調査全般にわたり調査団長先生をはじめ、調査員調査補助員、作業に従事いただいた皆様方の御尽力、発掘調査にご協力いただいた宮脇一美・吉川仁史氏他、地権者の方方に対し厚くお礼申しあげます。

今回調査により発掘された遺物は大切に保存し、当記録とともに後の学術資料としても大いに役立つものと期待します。さらに今回成果は極少のものであり、意義において格別なものがあります。次年度、同遺跡のひき続く発掘調査が順調に行なわれることを願ってやみません。

昭和61年３月

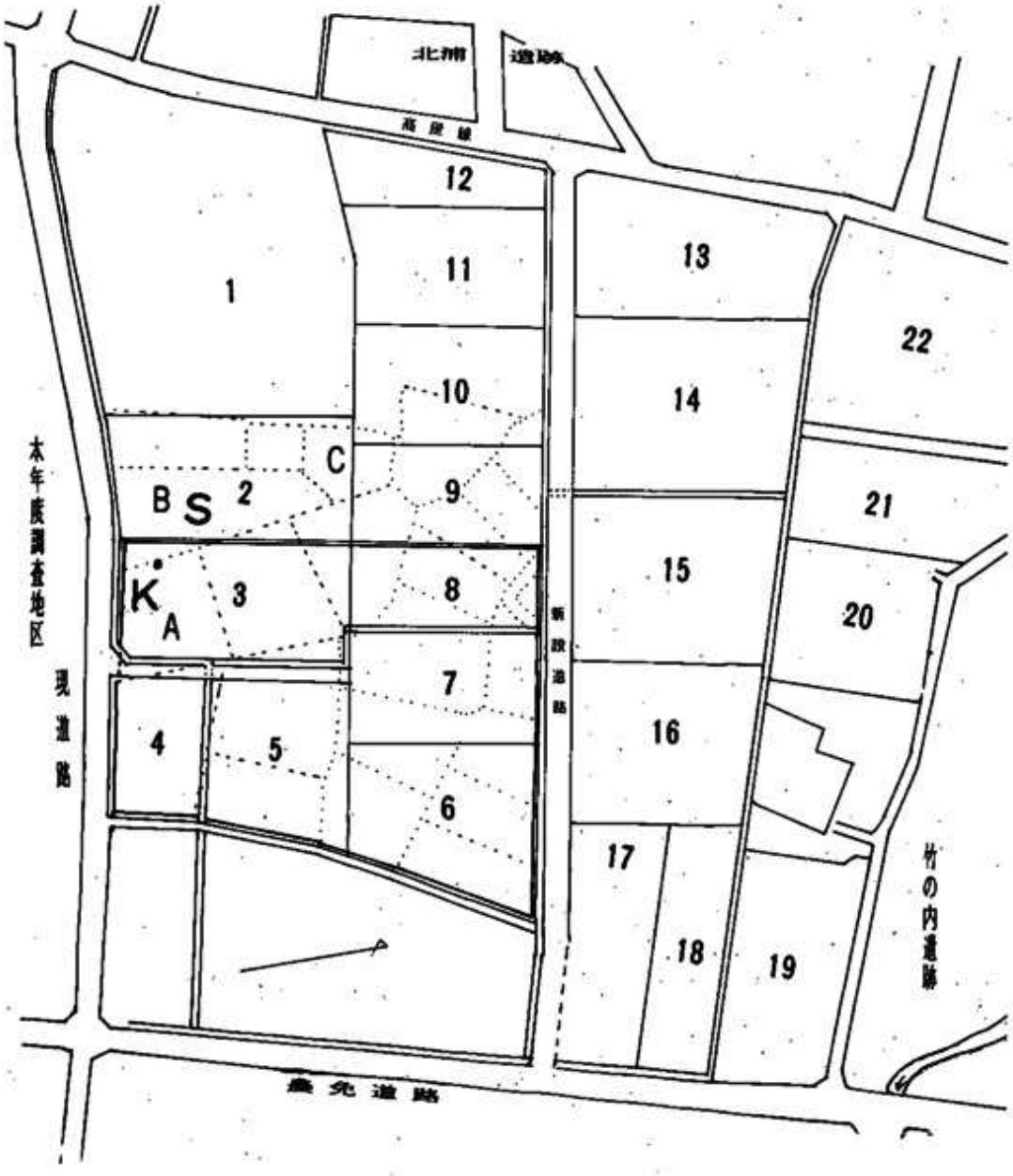
上郷町教育委員会

棚田遺跡調査委員会

北原　忠夫	上郷町教育委員会委員長		小木曽英寿	上郷町文化財保護委員会委員長	
吉川　昭文	同上	教育長	牧野　光彌	同上	副委員長
小室　伊作	同上	委　員	麦島　正吉	同上	委　員
矢崎　和子	同上	委　員	稲垣　　隆	同上	委　員
北原　　勝	同上	委　員	菊本　正義	同上	委　員

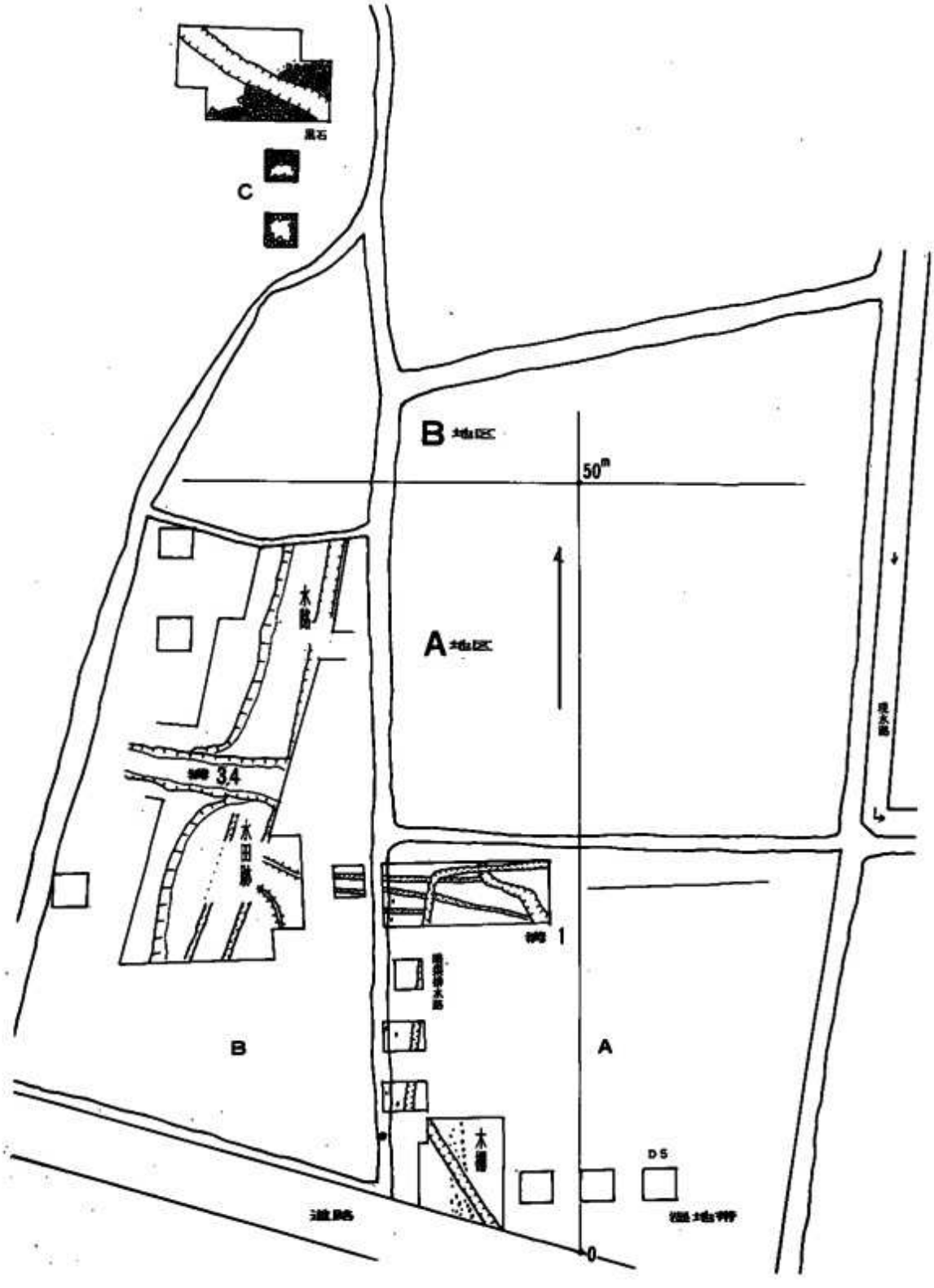
1，渡場　2，蓁田　3，矢崎　4，宮垣外　5，化石　6，中島　7，ドドメキ　8，高屋下　9，高屋　10，棚田　11，竹の内　12，北浦　13，びくに田　14，一丁田　15，蔵越　16，雲彩寺　17，堀尻　18，南原　19，ヒエ田　20，芝崎　21，御蔵前　22，的場　23，釜の口　24，院下　25，西浦　26，ママ下　27，堂垣外　28，丹保　29，矢剣　30，横爪　31，長橋　32，蔵上　33，高松原　34，飯沼城　35，古城

1図　上郷町棚田遺跡の位置 別府・南条・飯沼面の遺跡

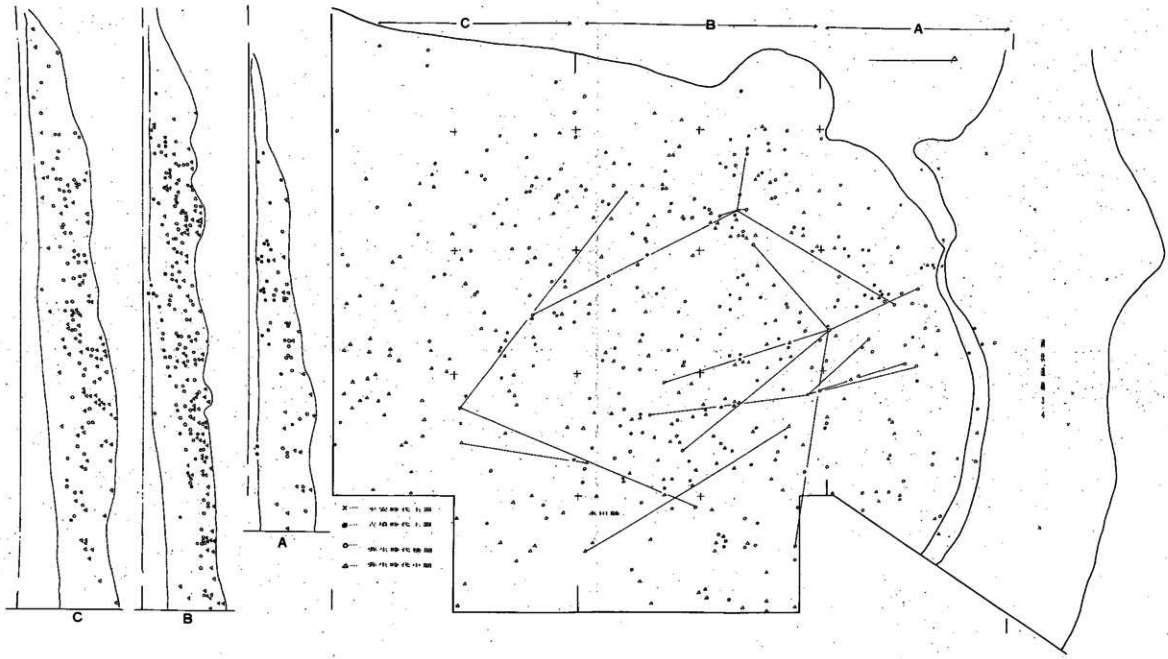


南条下田圃地区農業構造改善事業は、昭和60年度第一期工事、61年度を第二期工事と予定されている。第一期工事区は3～6にかけての地域で後は来年度の予定である。棚田遺跡は高圧線から下、現道路の南から新設道路辺りまでと考えられていた。調査の結果、Kは木柵杭列・Sは水田跡と水路・Cは累石である。8・9辺りも黒色土の堆積が深く木杭が発見されている。この辺りから14・15にかけては青灰色砂質土が高くなっているので、20～22にかけては遺物・遺構の存在も予想される。6・7の新設道路面は、青灰色土が1.5mと深いので3・4・5に続く低湿地であろうかと思う。

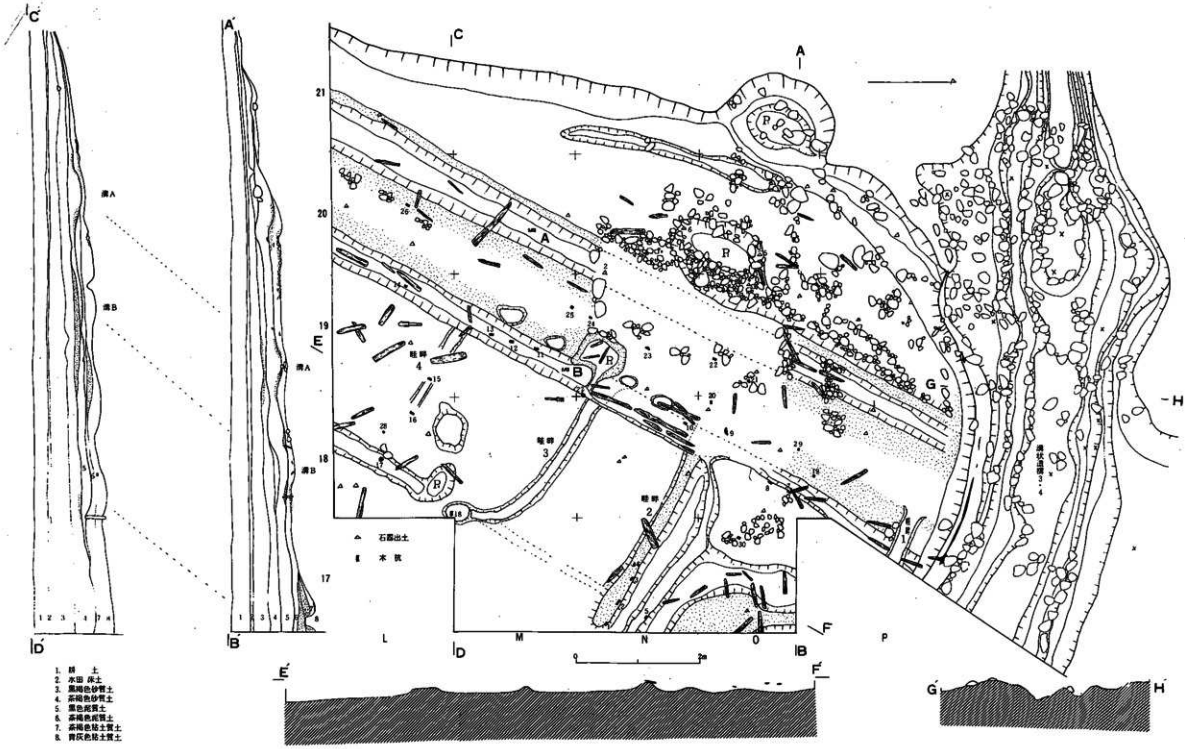
2図　南条下田圃地区農業構造改善事業地



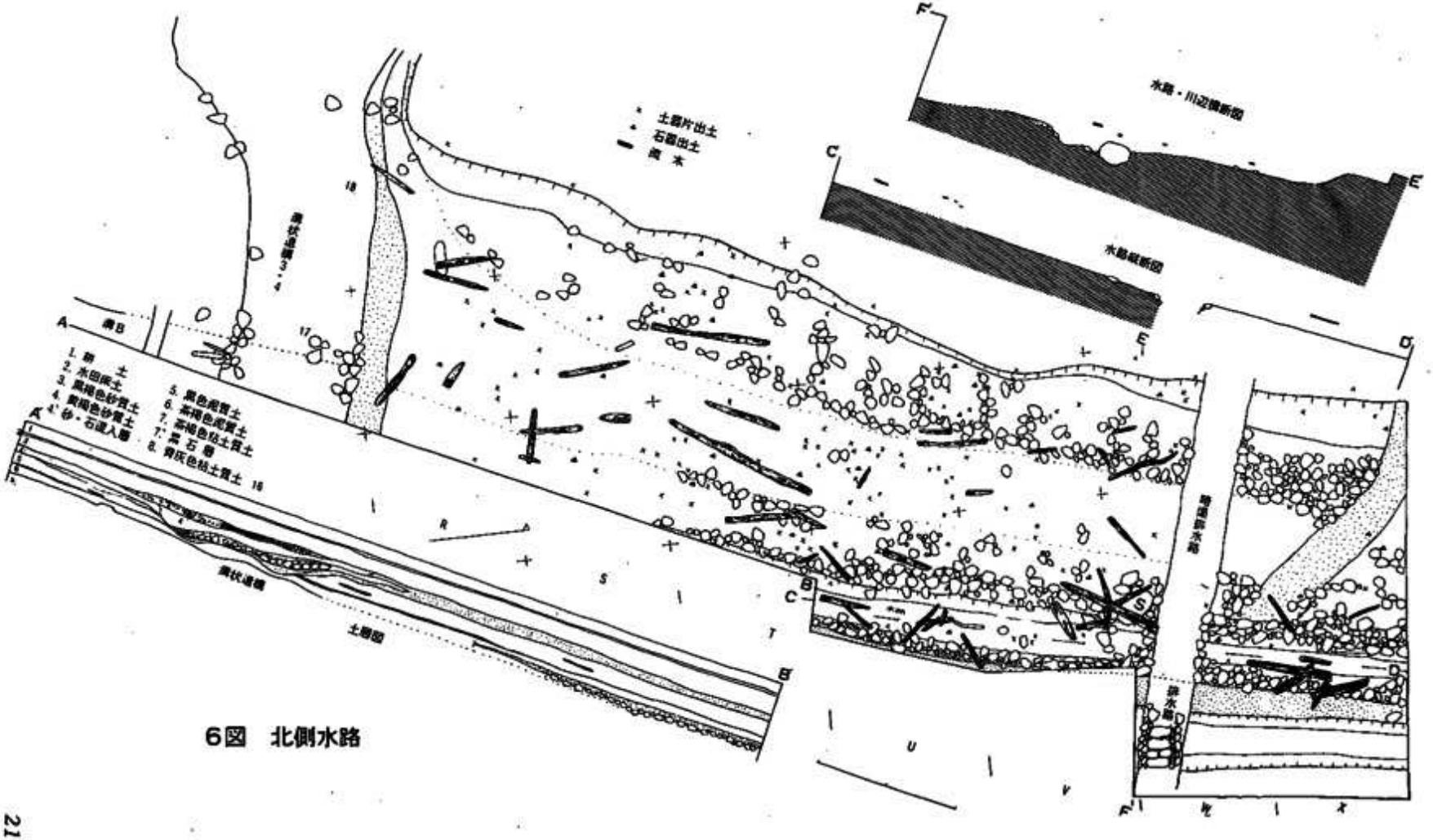
3図　棚田遺跡遺構全体図（1：600）



5図　水田跡周辺土器片出土地点

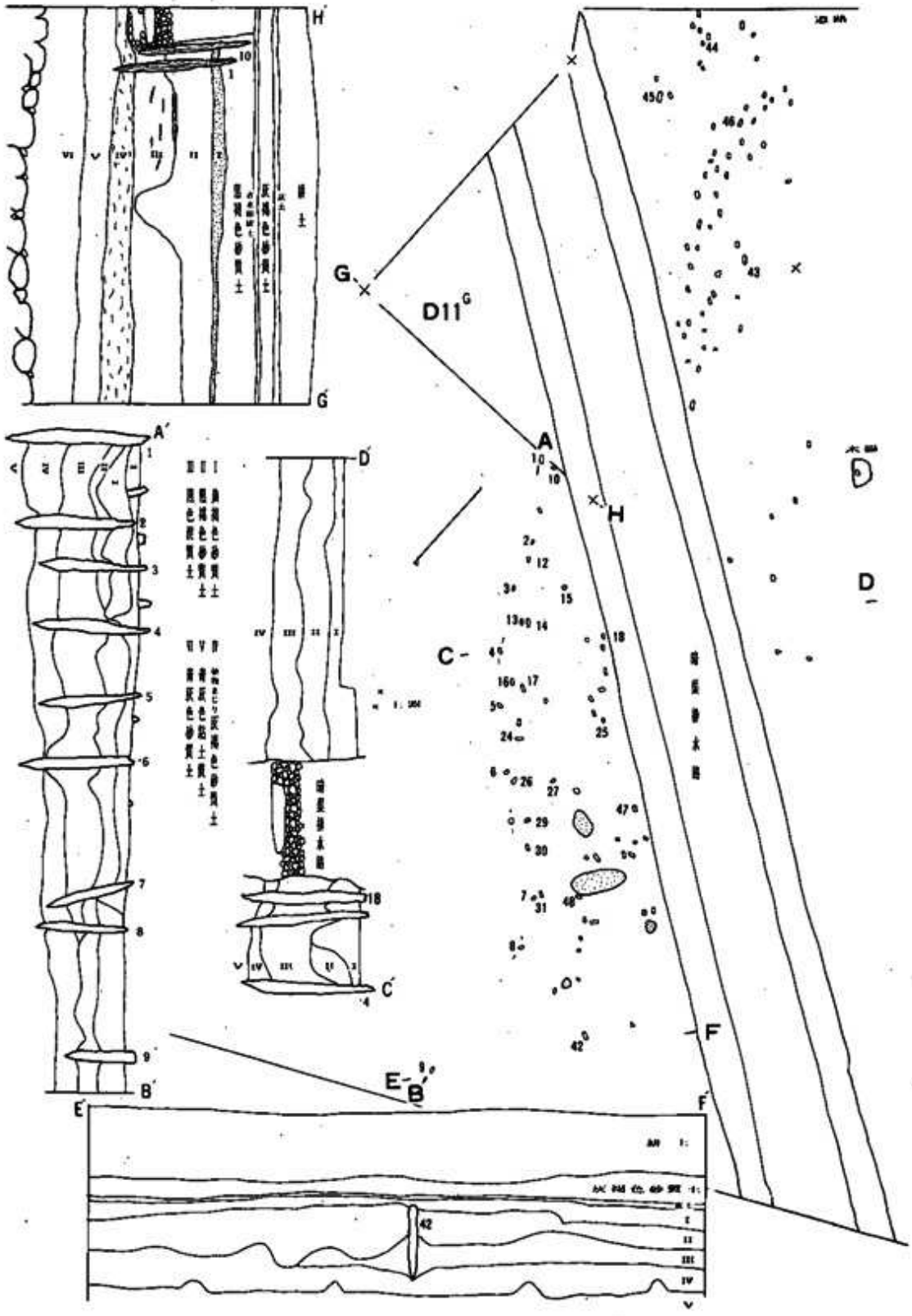


4図　水田跡、溝A・B、溝状遺構3・4

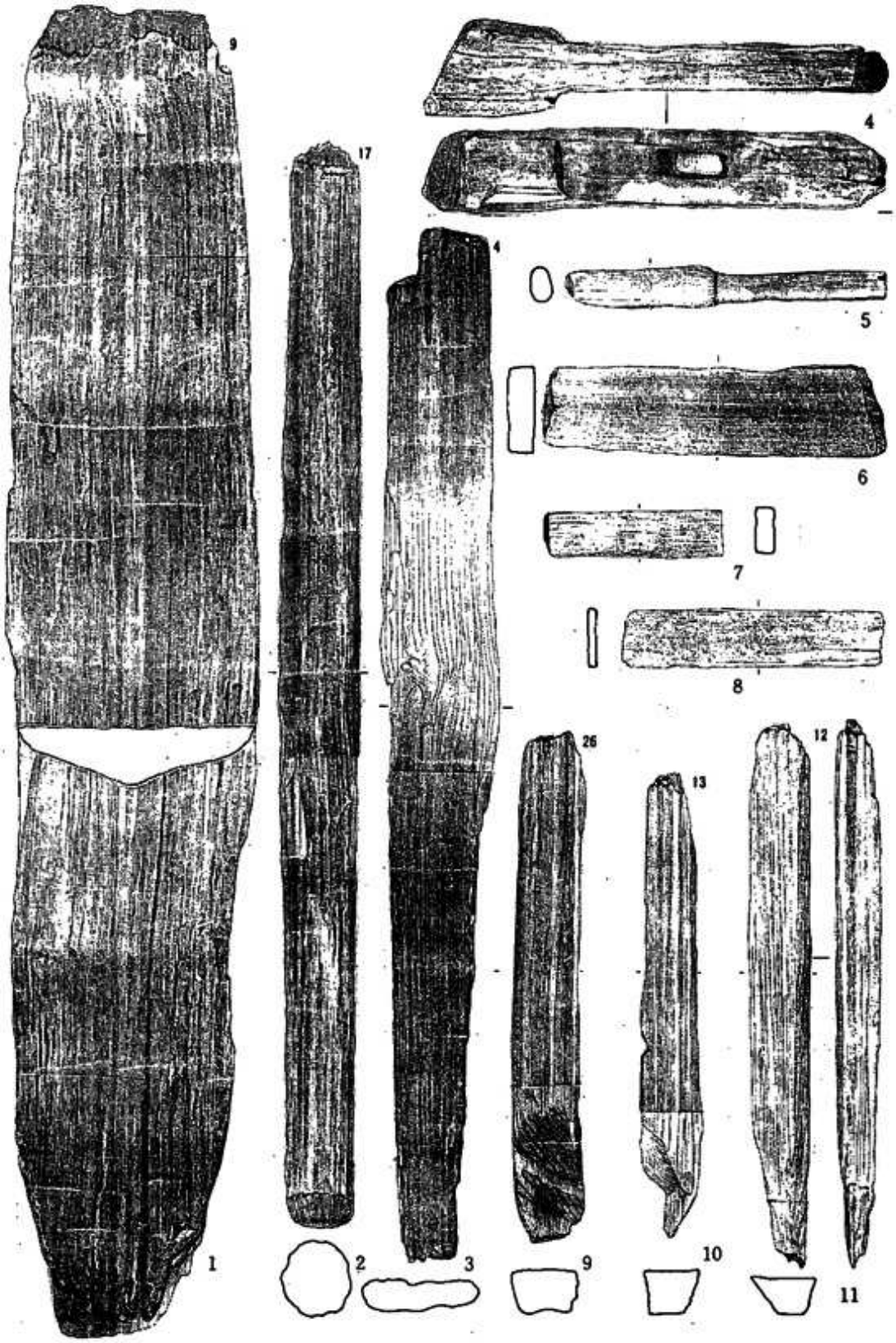


水路・川辺横断図
水路縦断図
土器片出土
石器出土
流 木
1. 耕 土
2. 水田床土
3. 黒褐色砂質土
4. 黄褐色砂質土
4'. 砂・石混入層
5. 黒色泥質土
6. 茶褐色泥質土
7. 茶褐色粘土質土
7'. 黒 石 層
8. 青灰色粘土質土

6図　北側水路



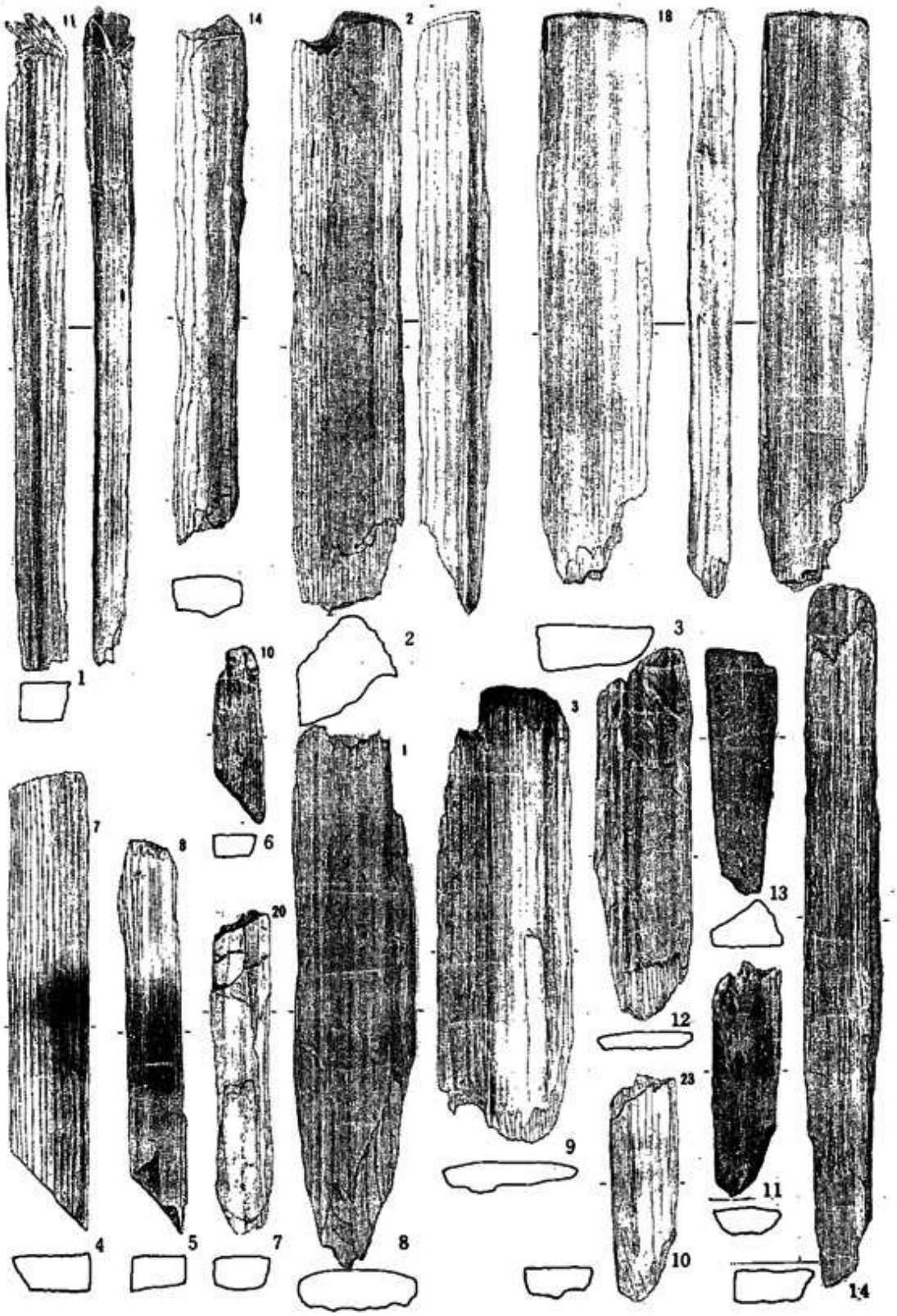
7図　木柵杭列の配置（30：1）



8図　弥生時代水田畦畔の木杭(1)と加工木製品（1：3）

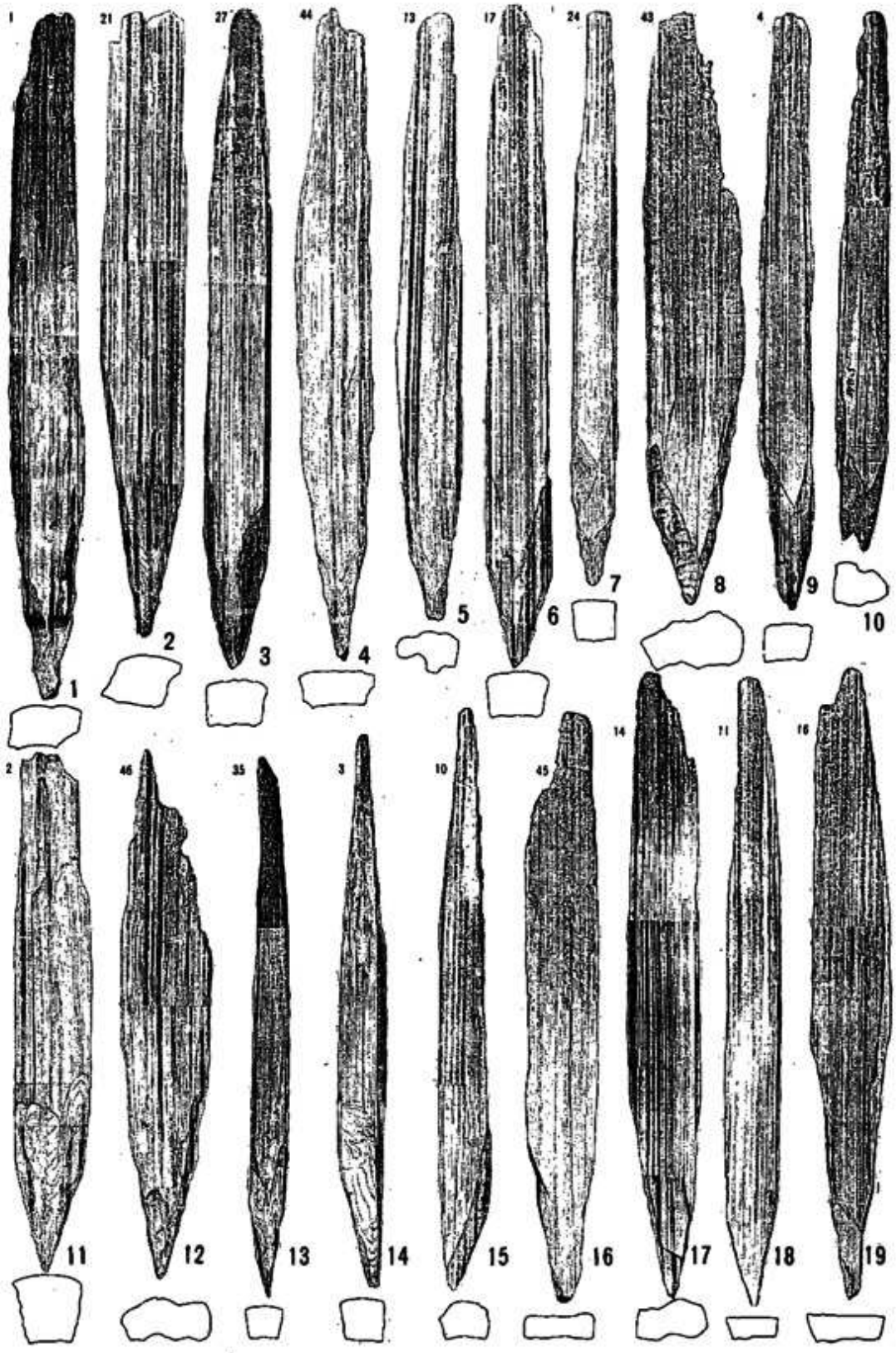
1～5，9～11 水田跡　　6～8 溝

小さい番号は杭番号

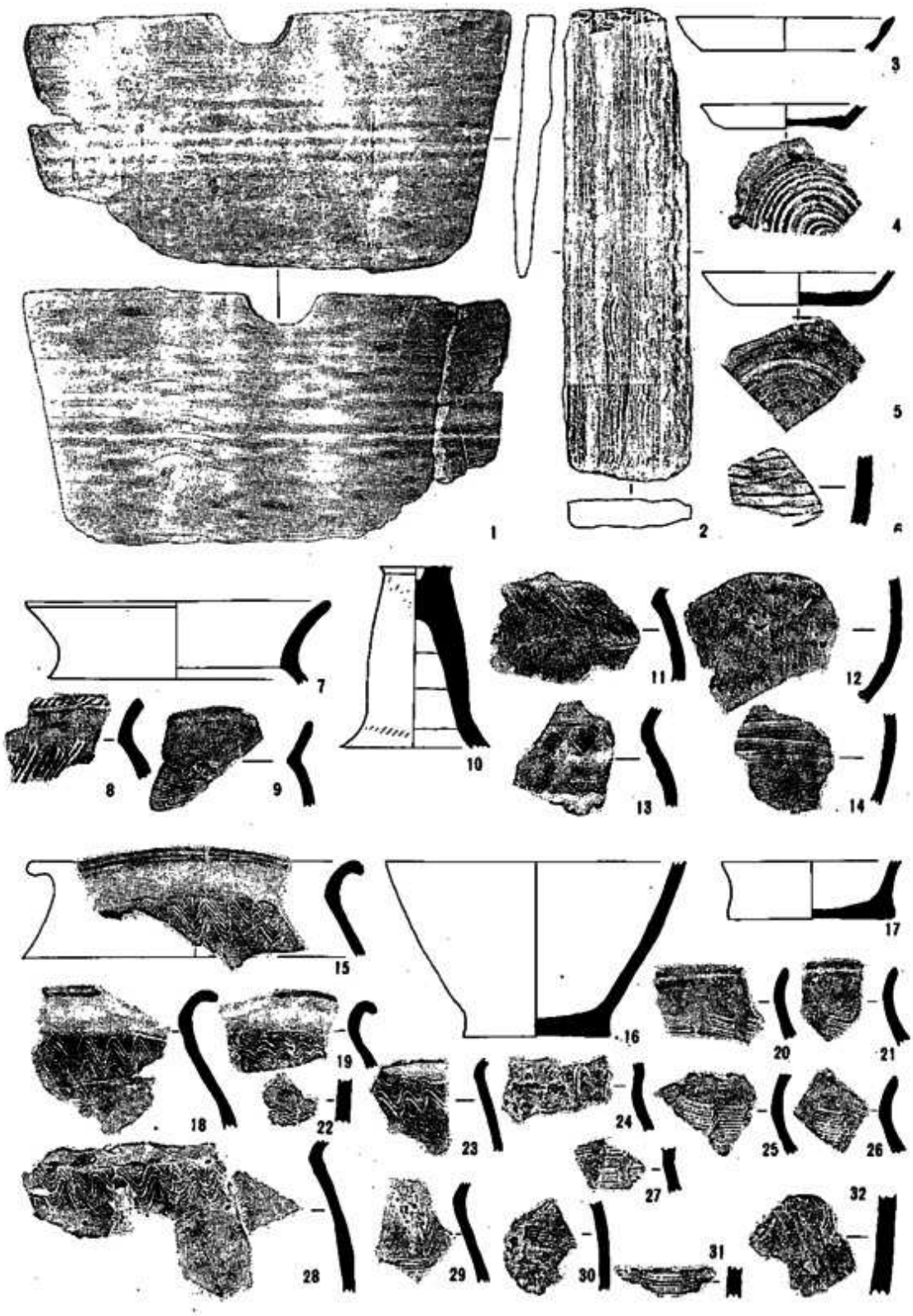


9図　弥生時代水田跡畦畔の杭(2)（1：3）

小さい番号は杭番号

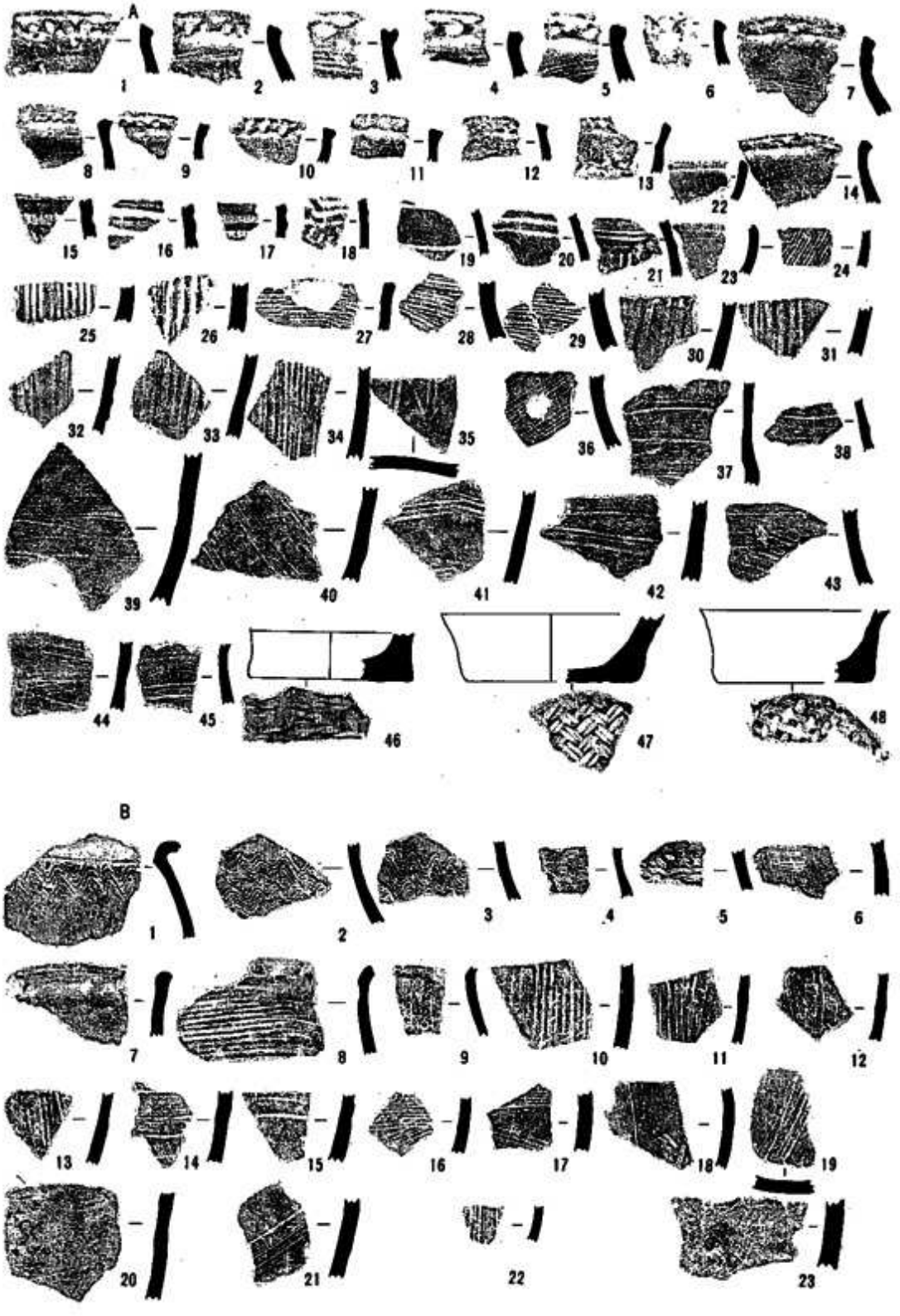


10図　木柵杭列の杭（1：6）　小番号は杭番号
断面の位置はほぼ中央



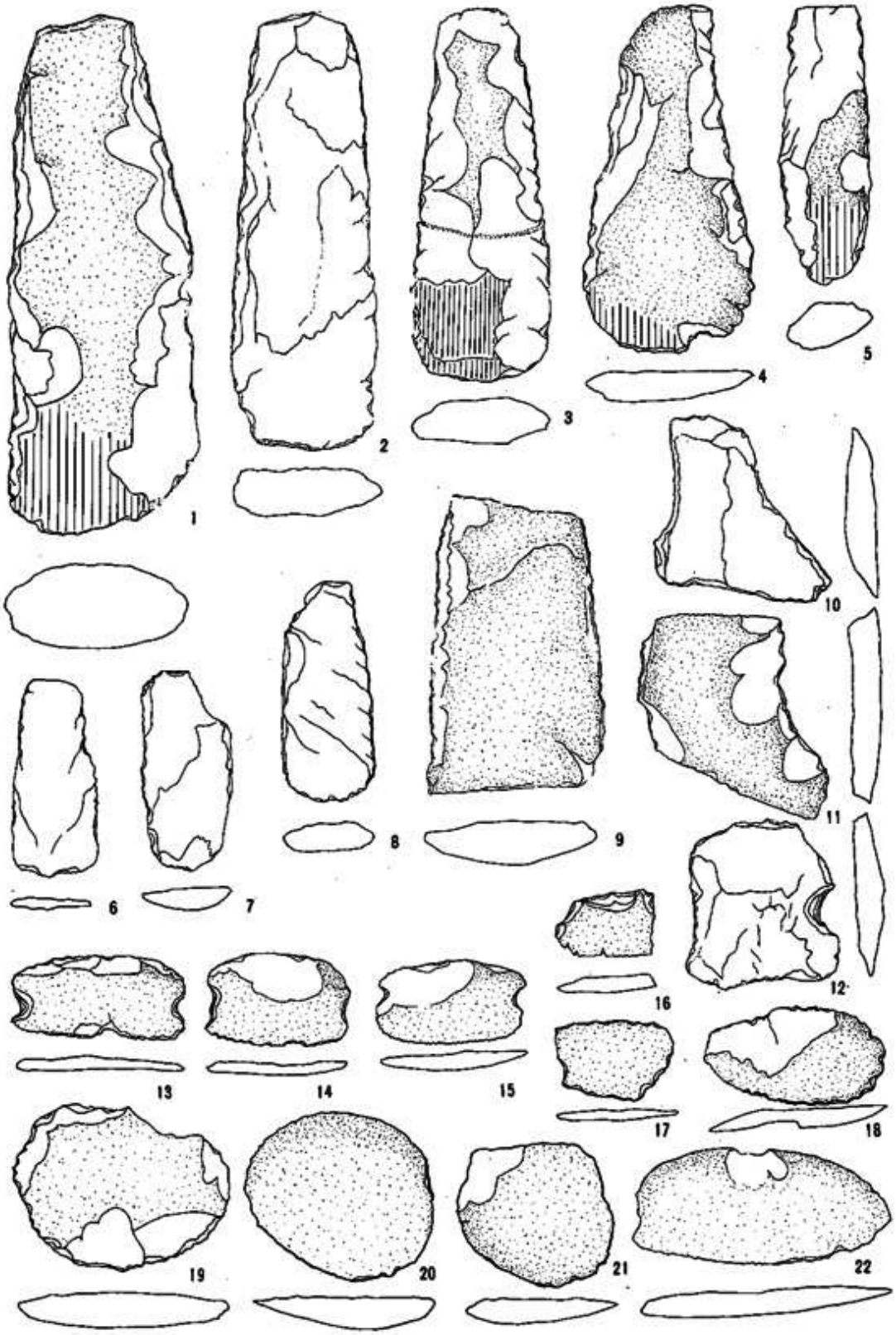
11図　木柵杭列・水田跡周辺出土の木製品と土器（1：3）

1，3～6 木柵列　2、D7 グリット
7～32 水田跡周辺

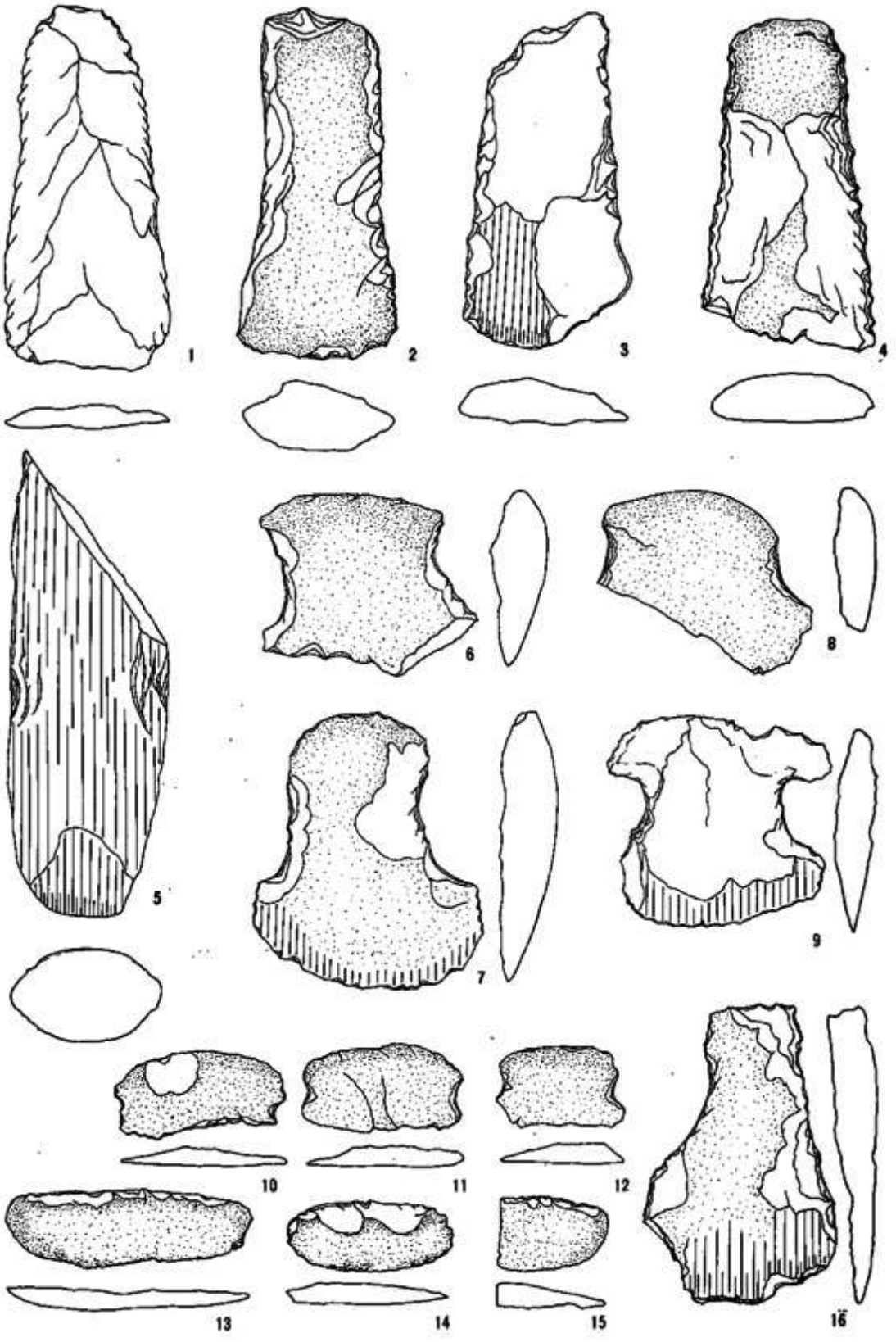


12図　水田跡周辺・水路出土の土器（1：3）

A 水田跡　B 水路

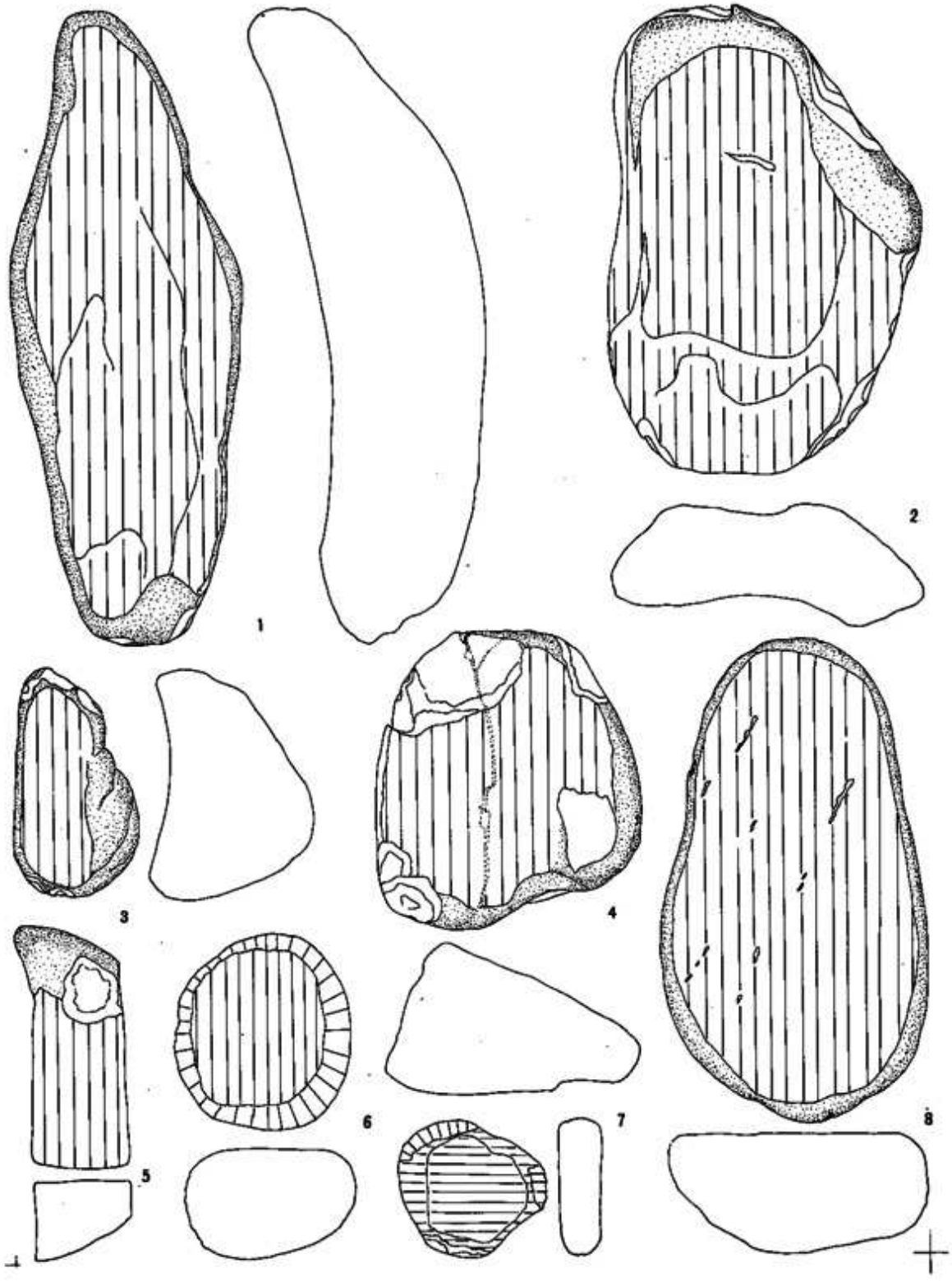


13図　水田跡周辺出土の石器（1：3）

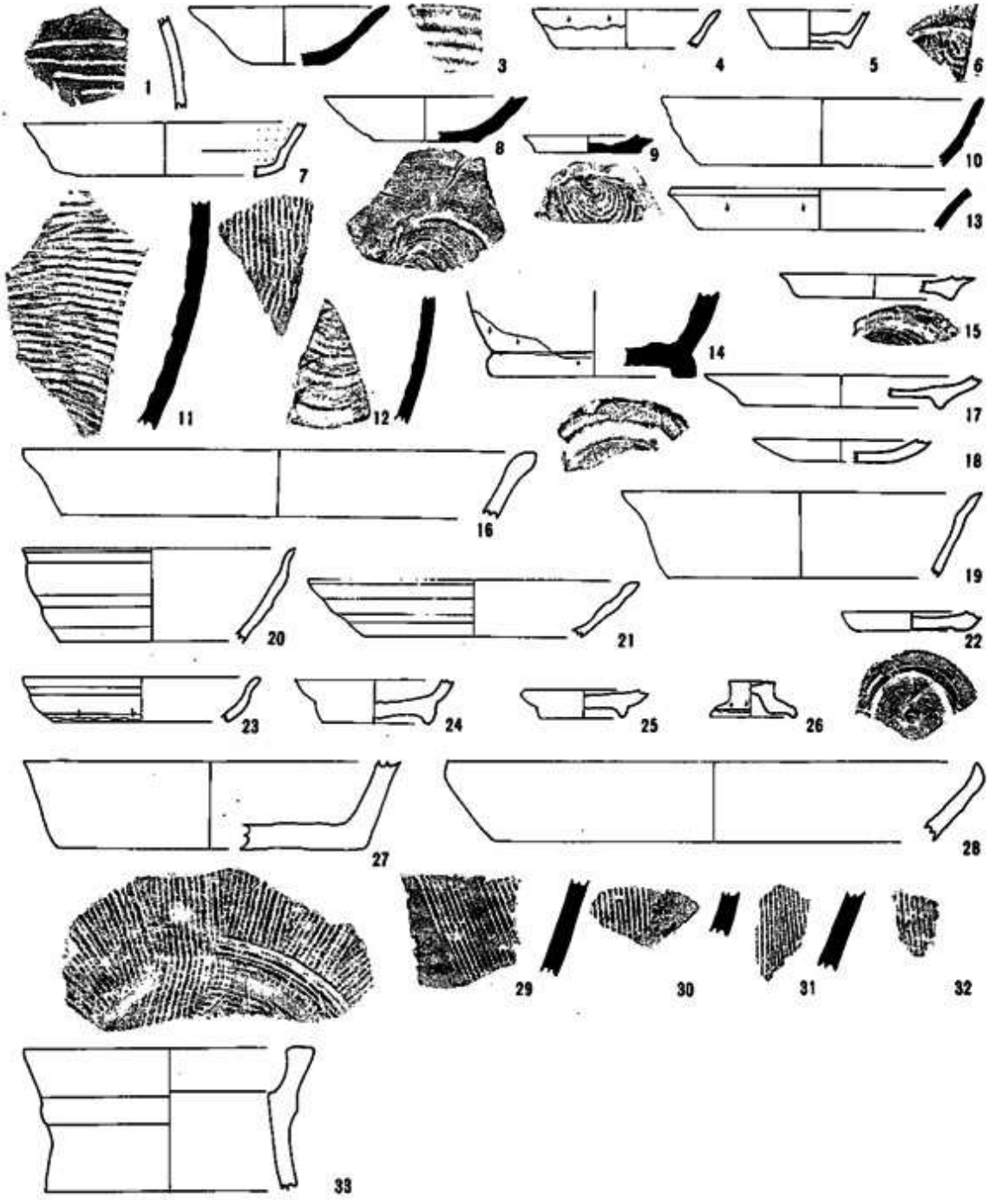


14図　水路と上段出土の石器（1：3）

1～7，10～12，15 水路
8，9，13，14，16 上段



15図　水路出土の砥石（1：3）



16図　溝3・4各グリット出土の土器・陶器（1：3）

図版１　南条棚田遺跡の景観

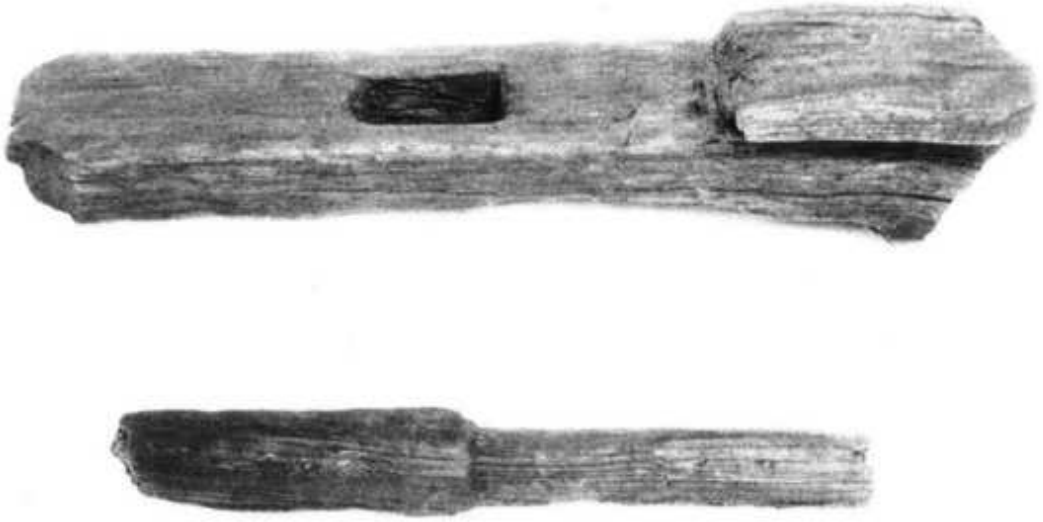
1.　西方から　ビニールハウスのあたりが調査区

2.　東方から　ビニールハウスの前　水田跡

図版２　水田跡、溝A・B

1.　西から（手前　溝A）

2.　東から（手前　畦畔2.3）



1.　建築遺材と加工木製品（撮影　唐木孝治氏）

2.　建築遺材出土状況（黒色土中層）

図版４　弥生時代畦畔の長大杭

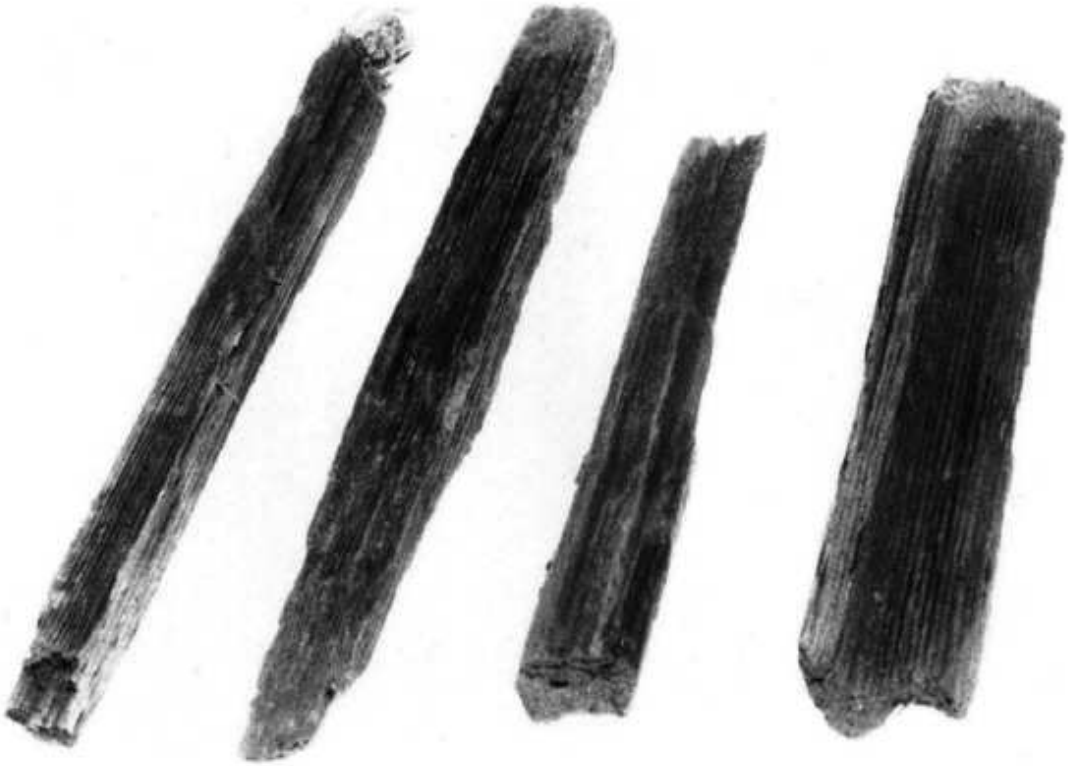
1. 長大杭（4・9・17）（撮影　唐木孝治氏）

2. 62㎝（9）の杭出土状況
（青灰色粘土中）

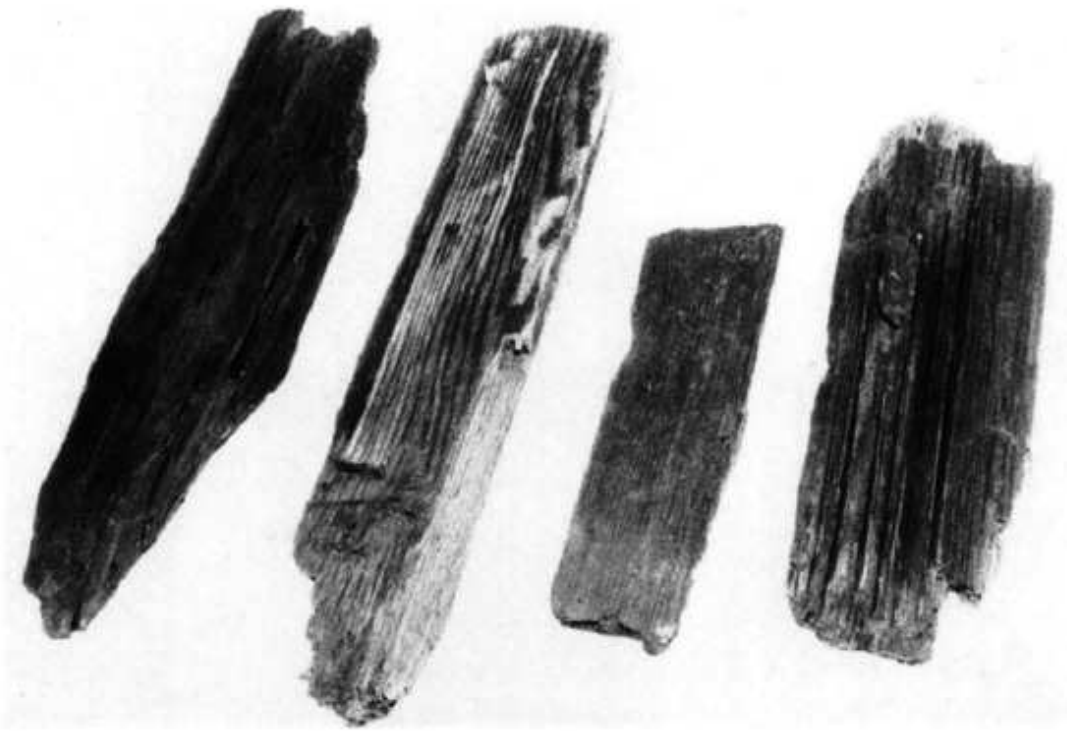
1.　杭先刃物加工杭（撮影 唐木孝治氏）

2.　杭先斜切断の杭（撮影 唐木孝治氏）

図版６　弥生時代畦畔短杭（２）



1.　矩形形の杭（撮影 唐木孝治氏）



2.　板状形の杭（撮影 唐木孝治氏）

図版7　畦畔木杭出土状況

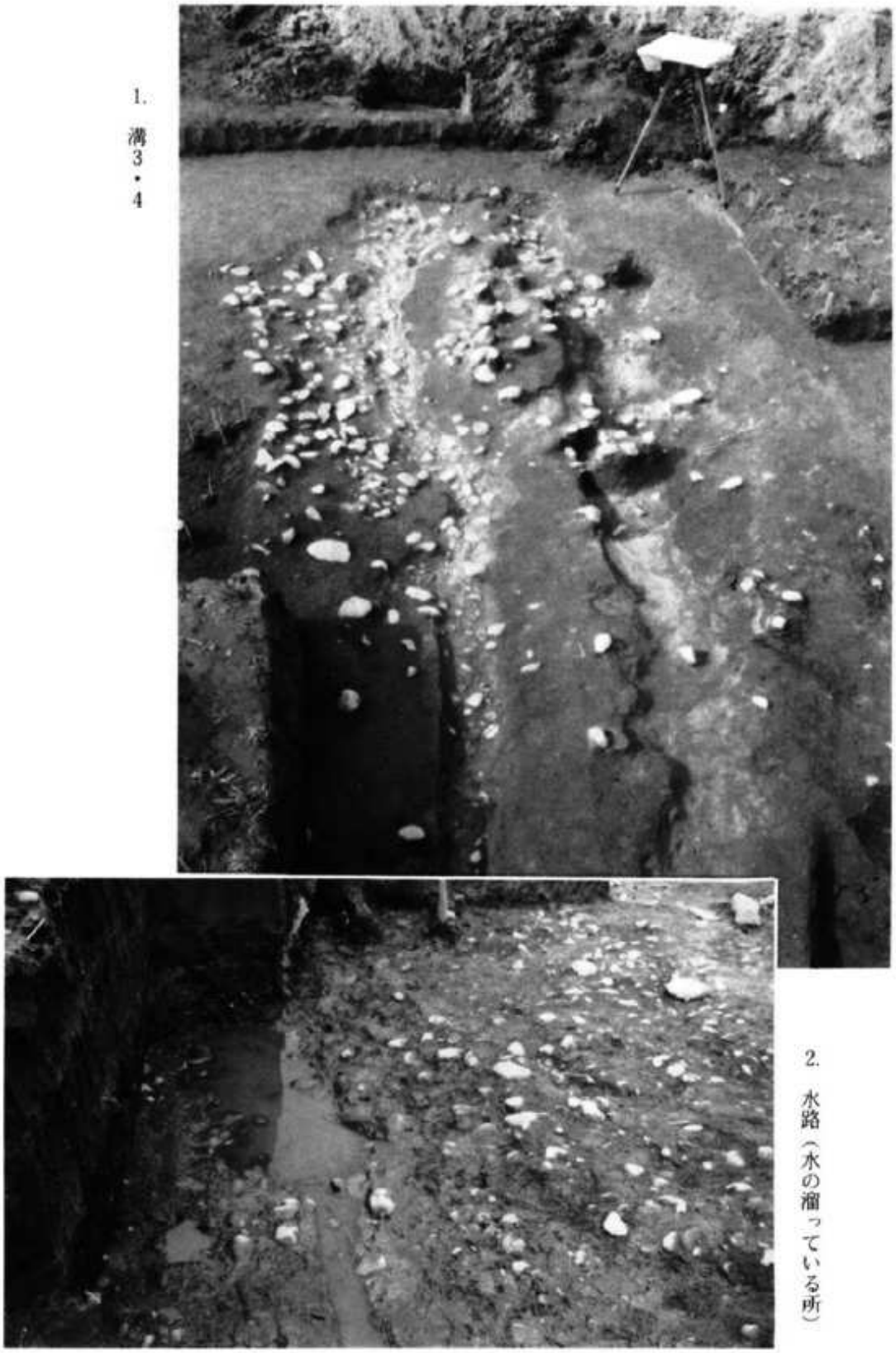
1.　杭頭の並び（11. 12. 13）

2.　杭18の出土状況 →

3.　杭11. 12. 13.の断面

図版８　水路と溝状遺構 3. 4

1. 溝3・4



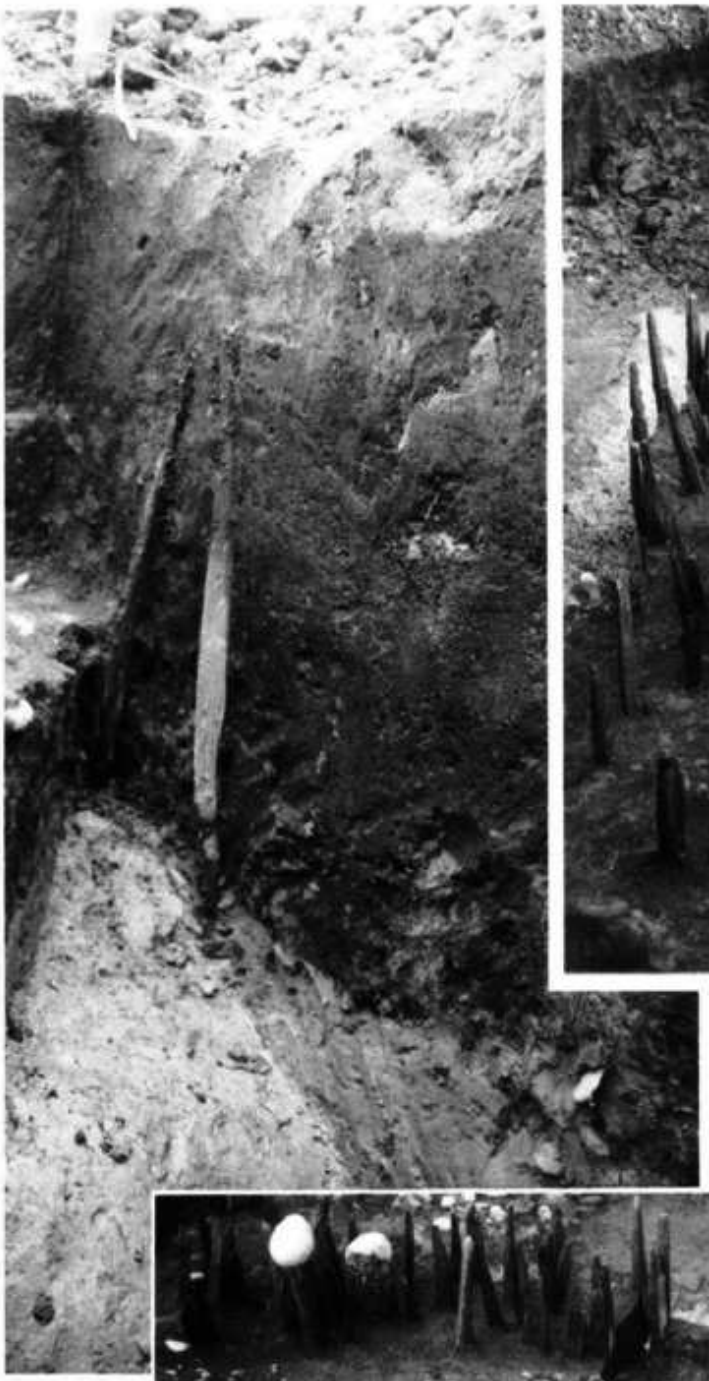
2. 水路（水の溜っている所）

1.　砂層面に見える木杭の頭

2.　東側の杭の並び

3.　南から見た杭列と断面（左の敷石は暗渠排水路）

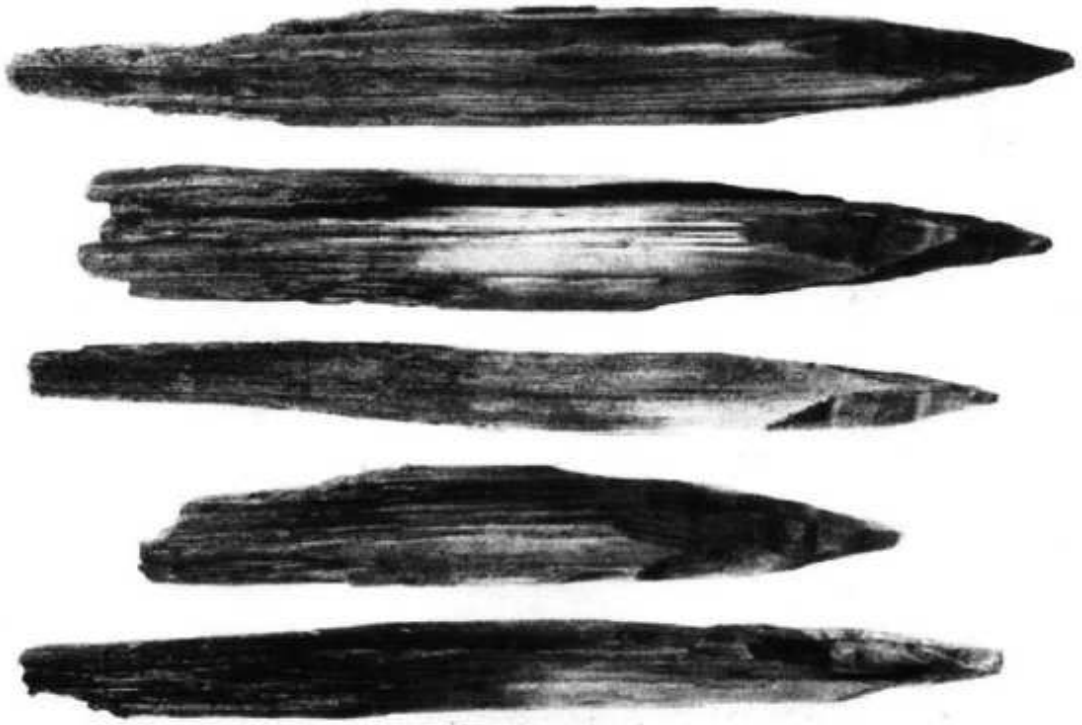
図版10　木柵杭列（2）



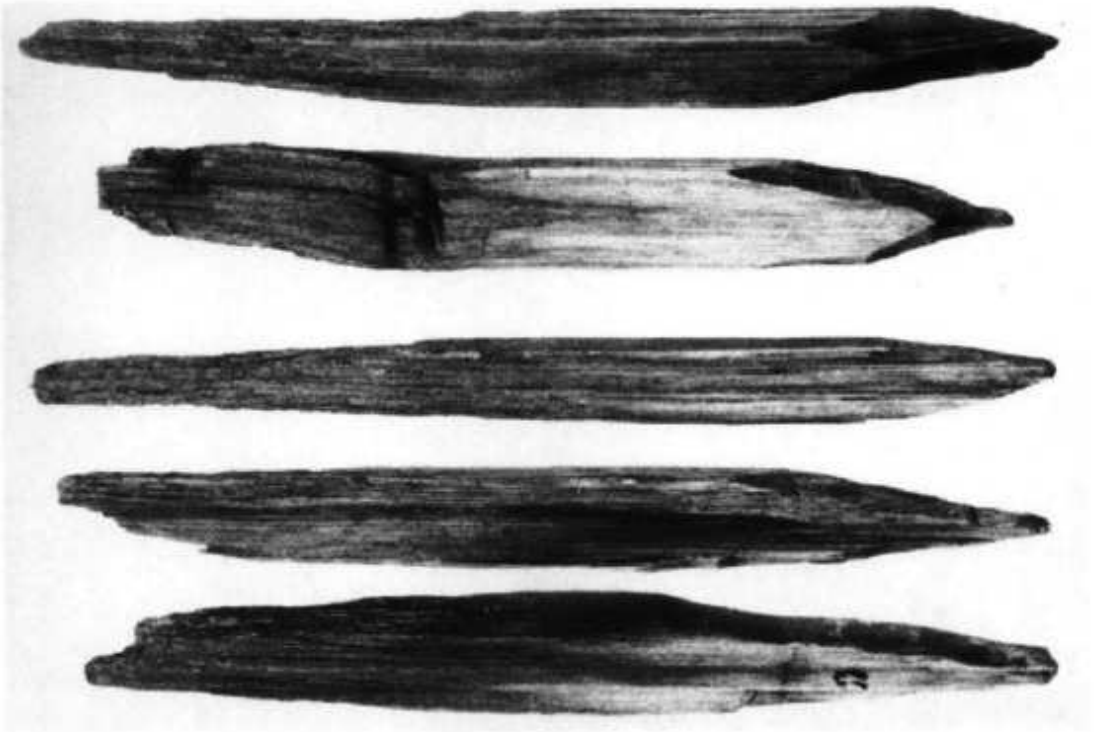
1.　木杭の層位

2.　木柵列の中層（北から）

3.　木柵木杭の並び（南から）

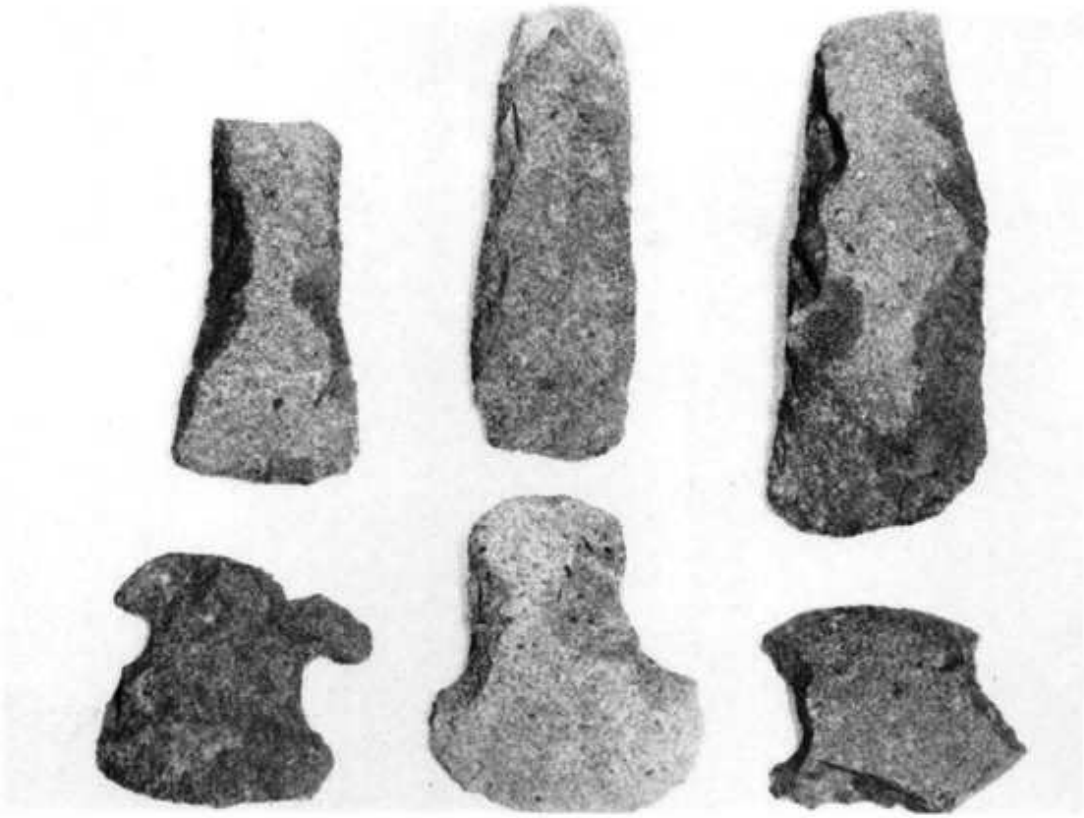


1.　杭先四方削り（1. 21. 27. 2. 14）　（撮影 唐木孝治氏）

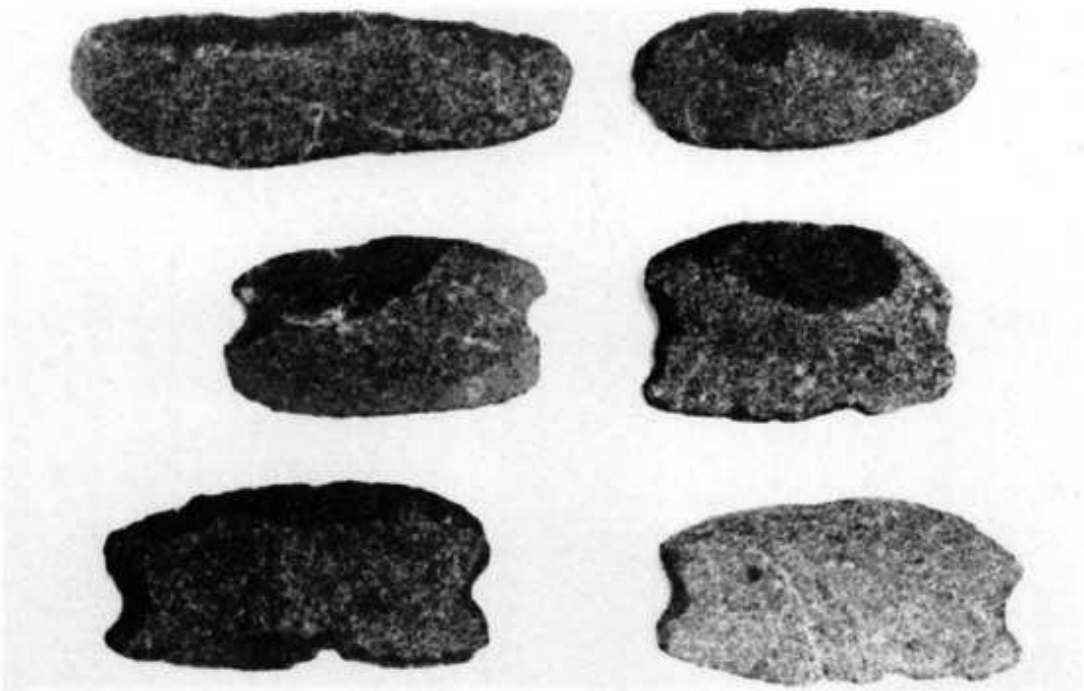


2.　杭先両側削り（4. 6. 10. 45. 16）　（撮影 唐木孝治氏）

図版12　弥生時代打製石器



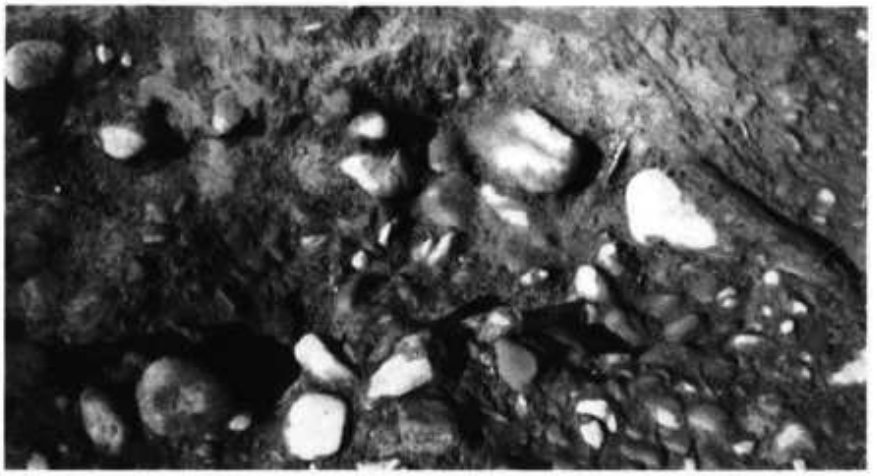
1.　打製 鍬形・有肩扇状形石器（撮影 唐木孝治氏）



2.　打製 石庖丁形石器（撮影 唐木孝治氏）

図版13　弥生時代石器出土状況

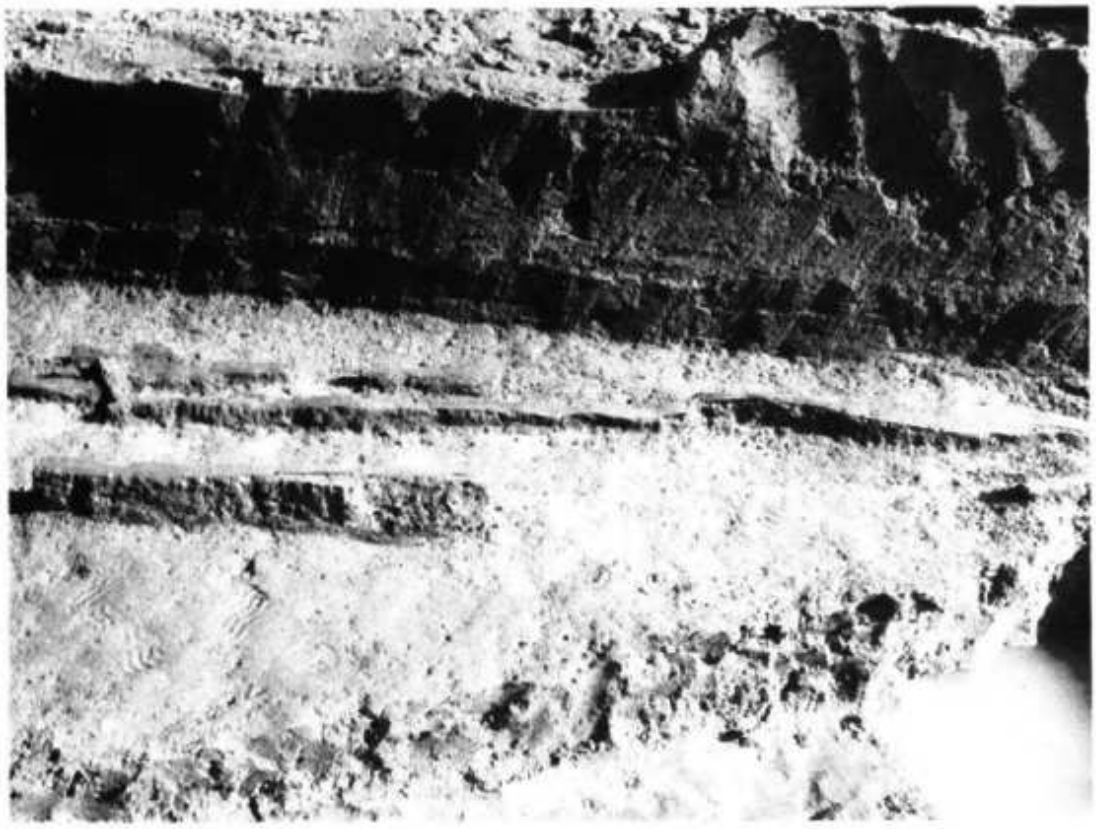
1. 水路出土　鍬形有肩扇状形石器



2. 水田跡西ピット中出土　石庖丁形石器

3. 水田跡西溝A出土　石庖丁形石器

図版14　流木出土状況



1.　溝B中の流木群
　　木の面　黒色土中層、下は茶褐色粘質土層

2.　水路の合流点　流木の堆積

3.　水路の流木

1.（上）O列セクションベルト西側

2.（右）O列セクションベルト東側（黒褐色砂質土から下）

3.　水田跡北・東側の土層（黒褐色砂質土層より下層）

図版16　調査団と発掘風景

1. 木柵の検出を終えて

2. 水田跡の拡張

3. 木柵の測量

南条棚田遺跡 I

昭和61年3月

発行　長野県下伊那郡上郷町産業課
　　長野県下伊那郡上郷町教育委員会

印刷　新葉社
　　飯田市常盤町飯田商工会館内